

なんぢの愛する者かく云へり、「われは汝の救ひなり、なんぢの平安なり、また汝の生命なり。」  
 「なんぢ我といもにをれ、さらば汝は平安を見出さん」と。すべて過ぎゆくものを棄て、永遠の  
 ものを求むべし。凡て現世のものは係蹄にあらずして何ぞや。また汝もし造主に棄てられたら  
 には凡て造られたるものは汝に何の益をか與ふるを得ん。この故に凡てのものに訣別して、己れ  
 を汝の造主の喜びたまふ忠信なる者となせ、これ汝をして眞の祝福を保ち得しめんがためなり。

## 第二章 眞理は無言にて心の中に囁く

僕さく、主より語りたまへ。<sup>1</sup>

われは汝の僕なり、われに智慧をあたへて、なんぢの證詞を知らしめたまへ、わが心を汝の口  
 の聖言に傾かしめ、なんぢの聖言を露のごとくに降らしめたまへ。

むかし、イストラエルの子等はモオセに云へり、「なんぢ我等に語れ、われら聞くべし、主をして  
 我等に語らしむること勿れ、恐らくは我等死せん」と。主よ、われは汝に斯くは祈らじ。むしろ

豫言者サムエルといもに、われは卑だりて熱心に、「僕さく、主よ語りたまへ」と懇願す。あゝ、  
 主なる神よ、モオセまた豫言者の誰をも我に語らしむることなく、すべて豫言者に靈をそゞぎて  
 照らし給へる汝、語りたまへ。そは汝はひとり彼等によらずして能く我等を全く教へたまへども、  
 彼等は汝によらずしては、何の益をも與へ得ざればなり。

まことに彼等は言を發し得れども、靈をあたふること能はず。「彼等はいと美はしく語る。され  
 ども、汝もし黙したまはば、彼等は心を燃やすことなし。かれらは文字を教ふ、されど心をひら  
 く者は汝なり。かれらは奥義を披瀝す、されど封じられたるもの、意味を解く者は汝なり。かれ  
 らは汝の誠を述べ、されど我等を助けて此を守らしむる者は汝なり。かれらは道を示す、されど  
 力を與へて此を歩ましむる者は汝なり。

かれらの爲すところは外部なり、されど汝は心を教へて照らしたまふ。かれらは外部に水灌ぐ、  
 されど果を結ばしむる者は汝なり。かれらは言をもつて大聲にさけぶ、されど聴く者の理解をあ  
 たふる者は汝なり。この故にモオセをして我等に語らしめず、あゝ我が神にして永遠の眞理なる



主よ、なんぢ我に語りたまへ、われ若し外より警めらるゝのみにて、衷に燃やさるゝことなくば、われは死して果のなきを示すべく、また聞きて行はず、知りて愛せず、信じて守らざりし言は、わが罪科となるべければなり。

この故に、僕きく、主より語りたまへ、そは永遠の生命の言は汝にあればなり。願くは我に語りて、わが魂を幾干か慰め、わが生涯を改めて全くなし、また汝の讚美と榮光と永遠の尊嚴とを顯はしたまへ。

### 第三章 神の言は卑れる心をもつて聞くべし。

されど多くの人は此を重んぜず

子よ、いとも楽しく、此世の哲學者と智者との凡ての智識にまされる、わが言を聴け。わが言は靈なり、生命なり、また人の智性によりて量らるべきものにあらず。此等の言は我を虚しき満

足のために潰すべきものにあらずして、沈黙のうちに聴き、全くへりくだりて、大なる情愛をもつて受くべきものなり。

また我は云へり、「あゝ主よ、なんぢの懲らしめたまふ人、なんぢの法を教へらるゝ人は、福ひなるかな。斯かる人を禍ひの日より逃がれしめ、また地上に寂しからしめ給はざらん」と。

主は云ひたまへり、われは始めより豫言者達を教へ、今日に至るもでも尙ほ萬民に語ることを止めざるに、多くの人は、わが聲にむかひて聾となり、頑なになれり。多くの人は神よりも、むしろ世に耳を傾け易く、神の聖旨よりも、肉の慾に従ふこと速かなり。世の約束するところは一時にして、些やかなるものなるに、人は大いに貪りて求め、わが約束するところは高くして永遠のものなるに、人の心は冷淡なり。世とその主君等に仕ふるが如くに正しく、凡ての事に於て我に仕へて従ふものは誰ぞや。あゝシドンよ耻づべしと、海いへり、而して汝もしその理由を訊ねば、その故いかんを聞け。



些やかなる利益を得んために、人々は幾里をも走る。永遠の生命を得んために、足を一たび地より擧ぐるものも稀なり。極めて価値なきものを、努めて獲るに足ると思ひ、たゞ一の貨幣のために往々耻づべき争ひをなし、虚しきこと、些やかなる望みとのために、日夜勞苦するを厭はざるなり。されど、あゝ、變はらざる善のためには、量りがたき報酬のためには、いと高き譽と窮りなき榮光とのためには、人々はいと些やかなる勞苦をすら吝めり。

この故に、怠りて呟く僕よ、なんぢが生きんために勞するよりも強く、死せんがために彼等の勞する事を思ひて、羞づべし。なんぢが眞理をよろこぶよりも強く、彼等は虚妄をよろこべり。

まことに、往々かれらは己が希望をうしなふことあり、されど我が約束は何人にもたがふことなく、また我に依りたのむ者を空しく去らすことなし。たゞ人もし我にをりて終りに至るまで忠信ならば、我が約束したることは、われ此をあたへ、我が云ひしことは、われ此を成就せん。われは凡て善き者に報ゆる者、また凡て敬虔なる者を強く嘉みする者なり。

なんぢわが言を汝の心にしるし、勉めてこれを冥想せよ、これ誘惑の時に甚だ必要なるべければなり。なんぢの讀みて悟り得ざるところは、我が眷顧の日にこれを知らん。二つの方法によりて我はわが選民をかへりみるなり、即ち誘惑と慰安これなり。また日毎にわれは彼等に二つの課業を讀み聞かせり、一は彼等の罪惡を責め、一は彼等を勵まして徳に進ましむること、これなり。

わが言をききて此を輕んずる者には、最後の日に彼を審判する者あるべし。

### 敬虔の恩寵を懇願する祈禱

あゝ主なる神よ、なんぢは我が凡ての善にましませり。われ如何なる者なれば敢て汝に語るべけんや。われは汝のいとも憐むべき小さき僕にして、穢らはしき蟲、自ら能く識り、或は敢て告白するにまさりて遙かに憐むべく、また賤しむべきものなり。されども主よ、我を記憶したまへ。われは數ふるに足らず、何ものをもしたず、また、何事をも爲し得ざればなり。汝のみ善なり、義なり、聖なり。なんぢは凡てのことを爲し得たまふ。なんぢは凡てのものを與へ、凡てのもの



を充たし給ふ。たゞ罪人のみを虚しく棄て置きたまへり。願くは主よ、なんぢの憐憫を想ひ起こし、汝の恩寵をもつて我がこゝろを充たしたまへ。なんぢは汝の聖業の虚しかるべきを欲したまはず。

なんぢの恩寵と汝の憐憫と我を支ふるにあらずば、いかで我はこの惨ましき世に自ら堪ふることを得んや。なんぢの聖顔を我にかくし給ふなかれ、われを顧みることを延ばしたまふなかれ、汝の慰藉を取り去りたまふなかれ、恐らくは我がたましひは、汝のみまへに燥きおとろへたる地のごとくならん。主よ、われに聖旨を行ふことを教へたまへ。汝のまへに正しく卑くだりて歩むことを、我に教へたまへ。そは主はわが智慧にして、我がありのまゝを知り、世のあらざりし前より、また世に我が生れざりし前より、我を知りたまへばなり。

#### 第四章 眞實と謙虚とをもつて神のまへに歩むべき事

一

子よ、眞實をもて我がまへをあゆみ、心をつくして常に我を求めよ。眞實をもて我がまへを歩む者は、害ちかづかして安らかなるべし、また眞理は、欺く者と、正しからざる人々の嘲りとより、彼を解き放たん。眞理もし汝に自由を得させば、なんぢは、まことに、自由ならん、而して人々の虚しき言を心にかげざるべし。

主よ、なんぢの聖言は眞なり、常にその如く我にあれかし。願くは汝の眞理われを教へ、われを守り、終りに至るまで我を救ひより離れしめず、凡ての悪しき溢りなる情愛と、溢りなる愛とより我を解き放ちたまへ、さらば我は心大いに自由にして、汝ともにも歩まん。

二



眞理は云へり、われは正しきこと、我が眼に宜しとするところを、汝に教ふべしと。なんぢの罪を省みて大いに厭ふべしと。而して必ず善き行ひの故をらつて自らを尊しとすること勿れまことに、汝は罪人にして、多くの情慾に攻められ圍まる。なんぢ自らにては常に空に馳せゆきて、忽ち倒れ、忽ち負かされ、忽ち狼狽し、忽ち亡びゆくなり。汝には誇るべきものとはなく却つて自らを侮るべき理由おほし、そは汝は能く汝の悟りをるよりも遙かに弱ければなり。この故に、凡て汝の爲すところの如何なるものをも大なりと思ふなかれ。たゞ永遠のものゝほか、何ものをも大なりとし、貴く奇しとし、何ものをも重んずるに足るとし、何ものをも高しとし、何ものをも眞に讚美し熱望すべしとすること勿れ。永遠の眞理をして、凡てのものに優さりて、汝を喜ばしめ、また汝みづからの全く價値なきことをして、汝にとり、絶えざる憂ひたらしめよ。地上の物の如何なる損失よりも、汝を痛ましむべき汝の罪惡のごとくに、恐るべきものなく、責むべきものなく努めて遯るべきものあることなし。

誠實をもつて汝のみまへに歩まず、たゞ好奇と誇りの心に惹かれ、己れと己が救ひとを忽諸にして、わが奥義を知り、神のたふときことを悟らんと願ふ者あり。斯かる人々は、われ彼等に抗

ふ時、おのが高慢と好奇の心とのために、往々大なる誘惑と罪惡とに陥るなり。神の審判を恐れ全能者の怒りにおのゝぐべし。いと高き者の聖書をあけつらふことなく、勉めて己が不義を究め汝いかに大なる過を犯し、また如何に多くの善行をなほざりにせしかを思ふべし。

おのが信仰を只書物に置くものあり、影像に置くものあり、外部の記號しごしと形象とに置くものあり。われを唇に置きて、心に置くこと稀なる者あり。心を照らされ、情愛きよめられて、常に永遠のものを慕ひ喘ぎ、地につけることを聞くを厭ひ、人性の必要に應ずべきことを遺憾とする者あり。而して此等の人々は眞理の靈の己が心のうちに語るところを聞くなり。そは眞理の靈は、地を輕んじて天を慕ひ、世を省みずして、絶えず、晝も夜も、天に憧るべきことを、彼等に教ふればなり。

## 第五章 神の愛の奇しき力に就て



天にいます父にして、我が主耶蘇基督の父よ、なんぢは敢て憐むべき我を心にとめたまへば、われは汝を崇めまつるなり。あゝ慈悲の父にして、すべての慰安の神よ、凡て慰安を受くるに足らざる我を、時に汝の慰安をもて養ひたまふ汝に、われは感謝す。われは汝を代々限りなく、汝の獨子、および慰め主なる聖靈とともに、讃めたまへまつる。

あゝ我が聖き愛する主なる神よ、なんぢ我が心に入りたまふ時、わが衷にあるものは凡て歡ばん。なんぢは我が榮え、また我が心の歡喜なり。なんぢは我が希望、また我が患難の日の我が避け處なり。

されど我れ愛に於て弱く、徳に於て完からざるがゆゑに、汝によりて強められ、慰めらるべきなり。この故に屢われを訪れ、汝の聖き訓練によりて我を教へたまへ。悪しき情慾より我を解き

放ち、我が心の凡て正しからざる愛を癒やしたまへ、かくて内心癒やされ、良く潔められて、愛するに適はしく、勇ましく苦しみ、堅く忍び得る者と我をなしたまへ。

二

愛は大なるものなり、然り大なる善なり、愛のみ凡ての重荷を軽くし、また凡て平らかならざるものを平らかに忍ぶなり。そは愛は重荷を負ひて重荷を覺えず、凡て苦きものを甘く味よきものとすればなり。

耶蘇の貴き愛は我等を勵まして大なる事をなさしめ、絶えざる願望を起こして、いよく完全に向かはしむ。愛は翔らんことを願ひ、下にあるものに引きとめらるゝことを欲せず。愛はその衷なる眼の曇らざるゝ事なく、この世の繁榮のために決して捉へられず、或は如何なる患難によりても、氣を落とすことなからんがために、自由に、自由にして、凡て世の情愛より脱せんことを願ふ。天地のあひだに、愛にまさりて美はしきもの、勇ましきもの、高きもの、廣きもの、樂しきもの



充てるもの、有ることなし。それは愛は神より生れ、而して凡ての造られしものに優さりて、たゞ神のうちのみ安息するを得ればなり。

愛ある者は、翔り、走り、而して歡ぶ、彼は自由にして抑へらるゝことなし。愛ある者は一切をあたへ、また一切を有す、それは萬物のうへに在し、而して一切の善の注ぎ出づる源なる、ひとり高いと高き者のうちに憩へばなり。愛ある者は賜を願みず、すべての善にまさりて、物を賜ふものに己れを向く。愛ある者は、しばし限度を知らず、熱烈にして一切の限度を超ゆることあり、愛は重荷を覺えず、苦痛を意とせず、己が力に過ぎたることを自ら努め、爲し難きことは決して云ふことなし。それは凡ての事は爲し得べく、また凡て遂げ得べしと思へばなり。この故に愛は強くして、凡ての事を爲すに足り、多くの事を爲し遂げ、これをして有功なることを確かならしむ、されど愛なき者は氣をうしなひて倒るゝなり。

愛は眼を醒し、而して眠るとも睡むことなく、たとひ疲るゝとも倦むことなく、妨げらるゝとも妨げられず、驚かざるゝとも狼狽することなく、燃ゆる火、また燃ゆる炬火のごとく、上にむかひて押し進み、安らげく過ぎゆくなり。もし愛を抱く人あらば、この聲の叫びの何なるかを知ら

るべし。魂の燃ゆる情愛あり、神の耳に大なる叫びを發して曰く、「わが神、わが愛よ、なんぢは全く我がものにして、我はまた全く汝のものなり」と。

願くは我を愛にひろくし、斯くて我をして我がことの衷なる口によりて、愛すること、また愛のうちを鎔かされ、浴することの如何ばかり樂しきかを、味はしめたまへ。願くは我をして愛に堅く捉へられ、己れを超えて燃ゆる熱誠と驚異とに攀ぢかほらしめ給へ。願くは我をして愛の歌をうたはしめ給へ。願くは我をして我が愛する汝に従ひて、高きにのほらしめ給へ。願くは我が魂をして愛によりて喜び、力の限り汝を讃めたまへしめたまへ。願くは我をして己れを愛するよりも、汝を愛し、たゞ汝のためにのみ己れを愛し、また汝より輝きいづる愛を律法の命するがごとくに、すべて眞に汝を愛するところの者を、汝にありて愛することを得させたまへ。

愛は敏く、誠實にして、務めを果たし、快活にして喜びに充ち、勇ましく、忍耐ぶかく、忠實にして、慎しみ深く、丈夫のごとく長く忍び、決して己れの利を求むることなし。それは己れの利を圖るところ、そこに愛よりの墮落あればなり。愛は慎しみて卑だり、まは正しきものなり、柔



弱、輕佻ならず、また虚榮に傾くことなし、酒を嗜まず、貞潔にして、堅實に、靜かにして、すべて官能の慾をつゝしめり。愛は長上に服従し、己れに對しては卑しみ輕んじ、神に對しては虔しくして感謝に充ち、神を樂しと思はれざる時にさへも、常に神を恃みて望あり、そは愛に生くる者にして、悲しみなきものあることなければなり。

喜んで多くの患難をしのび、愛する者の意に従ひて、己れを棄てざる者は、愛ある者と稱へらるゝに足らず。愛ある者は、その愛する者のために、凡ての艱難と苦しみとを歓迎し、如何なる障礙にあふとも、此より離れ去るべからず。

## 第六章 眞實に愛する者の證據に就て

### 一

子よ、なんぢは未だ大膽にして聰明なる愛を抱く者にあらず。

主よ、何故なりや

些やかなる障碍のために、汝は己が志を振り捨て、慰藉を求むること熱心に過ぐるがゆゑなり。愛を抱く者は誘惑の時に堅く立ち、敵の巧みなる勸めに耳を傾くることなし。天候好き時に我は彼を悦ばすがごとく、天候あしき時にも、我は彼の厭ふところとならざるなり。聰明なる愛を抱く者は、己が友の賜を顧みずして、與ふる友の愛を重んずるなり。かれは賜の價ひよりも、寧ろ情愛を貴び、愛する者をその凡ての賜のうへに置くなり。貴き愛を抱く者は、賜にあらず、凡ての賜にまさりて我のうちに安んずるなり。

なんぢ時として汝の願ふがごとくに、なんぢの心が、我または我が聖徒にむかひて動かさるゝことなくとも、絶望すべきにあらず。往々なんぢの感ずる善き樂しき情愛は、その時の恩寵の結果にして、また汝の天の家の豫兆なり。されども、來りて去るものなれば、なんぢ深くこれに頼るべからず。されど心の惡しき衝動にさからひて戦ひ、惡魔の囁きを斥くるは、徳の徴にして、



また大なる功績なり。この故に、外よりの怪しき想をして、如何なるもの此を嘯くとも、汝を煩はしむること勿れ。神に對する汝の決心と、汝の正しき志とを、堅く守るべし。

時として汝が俄かに歡びにあふれて恍惚となり、而して直ちに常のごとく、汝の心の愚昧に歸ることあるとも、これは妄想といふべきにあらざるなり。そは此等のことは、汝が止むを得ずして受くるものにして、自ら求むるものにあらず、而してなんぢ此等のものを好まずして、抗ふかぎり、これは功績にして、亡滅にあらざればなり。

知るべし、舊き敵は、なんぢの善を爲さんと欲するを妨げんとして、凡ゆる方法を試み、また信仰につける凡ての修業、即ち聖徒を尊び、我が受難を度しく記念し、罪の赦しを想ひ起こして益を得、おのが心を警戒し、徳に進まんと堅く志すことを、汝より除かんとするなり。彼はなんぢに疲勞と恐怖とを起こして、なんぢを祈禱と聖き讀書とより離れしめんがために、多くの惡しき思ひを、汝に生ぜしむ。へりくだれる懺悔は、彼の堪へざるところなり、而して若しかなはゞ、汝をして聖餐を廢せしめんことを欲するなり。

たとひ彼しばしば汝にむかひて、欺瞞の係蹄を置くとも、彼を信することなく、また彼に心をとむること勿れ。彼が悪しく且つ聖からざる思ひを嘯く時は、これに對して彼を責めよ。彼に云ふべし、潔からざる靈よ、去れ、呪はれたる者よ、恥づべし、わが耳に斯くのごときことを嘯く汝は、いたく穢れたる者なり。なんぢ思はしき誘拐者よ、われを離れ去れ。なんぢは我に關るところなかるべし。されど耶穌は強き勇士のごとくにして、我とも在すがゆるに、なんぢは恥ぢを取るに至らん。われは汝に従ふよりは、むしろ死して如何なる苛責をも受けん。沈黙せよ、たとひ汝なほ我を惱ますとも、我はもはや汝に聞かざるべし。主はわが光、わが救ひなり、われ誰をか恐れん。たとひ軍勢われに逆らひて聯らなるとも、わが心恐れじ。主はわが助け主、また我が贖ひ主なり。

二

善き兵卒として戦ふべし。而して汝時として弱きがために倒るゝことあるとも、前よりも大な



る力を出だし、更に大なる恩寵を我より受くることを信じ、愚かなる自負と高慢とを、大いに慎しむべし。人多くは是がために誤るに至り、時として殆んど癒やすべからざる盲目に陥ることあり。斯く愚かにも自ら傲り高ぶる者の亡滅をして汝に、謹慎と絶えざる謙虚とを教へしめよ。

## 第七章 謙虚の警護の下に恩寵を秘め置くこと

子よ。敬虔の賜を秘め置きて、自ら高き思ひを抱かず、また此に就て多く語らず、此に就て多く思はず、むしろ自らを軽んじ、受くるに足らざる者に與へられたるものゝ如く、これを恐るゝは、汝のために有益にして安全なり。われらは此感情に縋るべからず、そは速かに變はりて反対となるべければなり。なんぢ恩寵に浴したる時には、これを受けずば如何に悲惨にして乏しきものなるかを思ふべし。なんぢの靈の生命の進歩は、なんぢが慰安の恩寵を蒙れる時よりも、むしろ此恩寵の退ける時、へりくだりて己れを棄て、忍びて耐へ、斯くて斯くの如き時に、祈禱にたゆむことなく、その他の常の務をして凡て全く廢することを容さず、汝の分を、力と智との限りをつくして、歎んで果たし、また心の乾燥と不安とを感ずるとも、全く己れをゆるがせにせざる

にあり。

それ事善く行はれざれば、直ちに忍耐をうしなひ、或は懶惰に流るゝ者多し。人の途は常に己れによらず、神は欲したまふ時に、聖旨のまゝに、聖旨にかなふ者に、與へ且つ此を慰めて、而して度を過ぎし給ふことなし。おのが力に餘ることを爲さんと欲したりしが故に、熱心の恩寵によりて己れを破滅するに至りし思慮なき者あり、彼等は己が弱小の度を量らず、己が理性の判断よりも、寧ろ己が心の慾に従へり。また彼等は敢て神の許したまふところに過ぎて大なることを望むが故に、忽ち神の恩寵をうしなふなり。自ら天に巢をつくりし者は、棄てられて、乏しく、悲惨なるものとなれり。これ彼等をして屈辱と困窮とのうちにありて、己が翅によりて翔らず、我が翼の下に信頼すべきことを悟らしめんがためなり。

主の途に未熟にして経験なき者は、思慮ある勧めによりて、己れを治むるにあらざれば、敗かれ易く、また破滅し易し。また彼等もし他人の経験を信ぜずして、己が妄想に従ひ、尙も自負より退くことなしとせば、彼等の終りは、危かるべし。高ぶりて自らを聰しとする者は、へりくだ



りて他人に治めらるゝことを肯んずること稀なり。些かの知慧を有して卑<sup>くだ</sup>たり、微かなる才能を有するは、學識の大なる寶を有して虚しく自ら足れりとなすよりも善し。汝を高ぶらしむるが如きものに豊かなるよりも、少く有するは汝のために善し。

おのが囊の窮乏と、また與へられたる恩寵を失はんことを恐るゝこと、即ち主を畏れかしこむことを忘れて、全く己れを歡樂に委ぬるは、慎みある者の行爲といふべからず。また悲難もしくは困難の時に、屈し過ぎて絶望し、而して恃むべき我を恃むところの想ひと感情とを少くする者も亦、徳に心ある者といふべからず。平和の時に安んじ過ぎし者は、戦ひの時に落膽し、恐れ過ぐるゝこと屢なり。なんぢ若し自ら絶えず卑<sup>くだ</sup>たりて、慎みぶかくなるを得たらんには、また更になんぢの心を賢く制御し治むる事を得たらんには、斯く速かに危険と過とに陥ることなからん。

熱心の靈もやさるゝ時、この光の去らん時いかになるべきかを、汝は慮らざるべからずと云へるは、善き勸めなり。斯くの如き時來たらば、汝を警戒するため、また我が榮光のために、暫らく我が取り去りし此光の、再び歸り來たることあるを想ふべし。斯くの如き試練は、なんぢの欲

するごとくに常に繁榮するよりも、益多きこと屢なり。それ人の價値は、幻と慰藉との多きにより、或は聖書に通ずることにより、或は高き位に置かるゝによりて、大なるにあらず、眞の謙虛に基し、神の愛に充つるにより、神の榮光に對する純にして眞實なる志により、己れを數ふるに足らぬものと思ひ、眞に己れを輕んじ、また人に崇めらるゝよりも、輕んぜられ、卑しめらるゝを歡ぶことによりて、大なるなり。

## 第八章 神の前に己れを低しと思ふこと

われは塵と灰となるに、敢てわが主に語るべきや。われ若し自らを此よりも優さるものなりと思はゞ、見よ、なんぢは我に逆らひて立ちたまひ、わが不義は實證せられ、我はこれに逆らふこと能はざるなり。されど我れ若し自らを賤しきものとなし、數ふるに足らざるものとし、すべて自尊の念を斥け、己れを挫きて、塵(これ即ち我なり)とせば、なんぢの恩寵は我をめぐみ、なんぢの光はわが心に近づかん、而して自尊の破片すらも、悉くわが無の谷に呑みこまれて、永久に亡ぶべし。そこに汝は我自らを示し、我が如何なる者にして、前には如何なる者なりしか、ま



た我が何處より來たりし者なるかを示し給はん。そは我は無にして、此を知らざればなり。われ若しひとり残されなば、見よ、われは無にして、全く弱し。されど汝もし俄かに我を顧みたまへば、直ちに我は強くなりて、新たなる歡喜に充たさるゝなり。また自らの重量のために常に沈みゆく我の、斯く俄かに引き擧げられ、斯く優さしく汝に抱かるゝは、甚だ奇しきことなり。

斯く多くの缺乏のうちに我を支へ、また押しせまる危險より我を護り、かぞへ難き禍ひ（眞に我は斯く云ふべきなり）より我を取り出だし、我に先んじ喜んで與へたまふ汝の愛、これ即ちその原因なり。そは己れを愛することによりて、我は己れを失へり。而して只なんぢのみを求むることによりて、また汝をきよく愛することによりて、われは己れをも汝をも見出し、この愛よりして我は、いよく、全く己れを無に歸したればなり。あゝ、いとも慕はしき汝よ、なんぢは凡て我が功績にまさりて、また凡て我が敢て望み或は願ふところに超さりて、我をあしらひ給へばなり。

わが神よ、なんぢは讃むべきかな、そは我は如何なる恵みをも受くるに足らざれども、尙ほな

んぢの卓れたる尊貴と無限の憐れみとは、恩を忘るゝ者にさへも、また汝より遠く離れ去りしものにも、恵みをくだして絶ゆることなし。願くは我等を汝にむかはせ、感謝し、へりくだり、また熱心ならしめたまへ。そは汝はわれらの救ひ、我等の勇氣、我等の力なればなり。

### 第九章 神を窮極として神に萬事を歸すべきこと

子よ。なんぢ若し眞に福ひならんことを願はゞ、我をもつて汝の最高にして最終の目的となすべし。この志あらば、誤りて己れに、また造られたるものに、甚だしく傾くこと屢に過ぐるところの汝の情愛は潔めらるべし。そは汝もし如何なるものに於ても己れを求むれば、直ちに汝の心はよわりて、乾燥すべければなり。この故になんぢは専ら萬事を、その據としての我に歸すべし。そは汝に凡てのものを與へしは我なればなり。物はおのゝ至高善より注ぎいづるものと思ふべし。この故に一切のものを、その源としての我に歸せざるべからず。小さきもの、大なるもの、貧しきもの、富める者は、活ける泉より汲むがごとくに、我より活ける水を汲む。而して自ら喜び進んで我に仕ふる者は、恩恵に恩恵を加へらるべし。されど我よりほかの物をもつて榮えとなし



或は己が善をもつて喜びとする者は、眞の歡喜を基とせず、また心を廣くせられずして、多くの障碍に遇ひ、窮迫するに至るべし。この故になんぢは善きことを凡て己れに歸せず、また徳を如何なる人にも歸せず、たゞ萬事を神に歸すべし、神によらざれば、人は何物をも有する事なし。われは萬物をあたへたり、われは萬物をわれに回復せざるべからず、而して我は人の感謝を要求すること極めて厳しきなり。

これ虚榮を放逐するところの眞理なり。またもし天の恩寵と眞の慈愛とが入りたりとせば、其處に嫉妬もなく、偏狹なる心もなく、また私愛なんぢを領することなかるべし。そは神の愛は萬づのものに勝ちて、魂の凡ての力を張らしむればなり。なんぢ若し眞に賢からば、たゞ我に於てのみ歡ばん、たゞ我に於てのみ望みを抱かん。そは神ひとりほかに善き者なく、神は凡てのものに優さりて稱へられ、また凡てのものうち崇めらるべきものなればなり。

## 第十章 世を輕んじて神に仕ふるの樂しきこと

主よ、今われは再び語りて黙さるべし。われは高きに在す我が神、わが主、わが王の耳にむかひて云はん、「主よ、なんぢを恐るゝ者の爲にたくはへ給ひし汝のいつくしみは、如何に太いにして豊かなるかな」と。されど汝はなんぢを愛する者に對しては、如何にましますぞや、心をつくして汝に仕ふる者に對して、如何にましますぞや。汝を冥想することの樂しさは、眞に云ひ盡しがたし、こは汝を愛する者になんぢの與へたまふところなり。殊になんぢの愛の樂しさを我に示し給ひしは、即ちわれ未だあらざりし時、なんぢ我を造り、われ汝を離れて遠くさすらひし時、なんぢ我を伴ひ歸りてなんぢに仕ふるを得しめ、また我に汝を愛せよと命じ給ひしこと、是なり。あゝ、愛の盡きざる泉よ、われ汝に就て何をか云はん。我が荒れはて、滅びし後に於てさへも我を憶ゆることを厭ひ給はざりし汝を、いかで忘るゝを得んや。なんぢは凡て望むところにまさりて、汝の僕に憐みを示し、また凡ての功績を超えて愛顧と友情とをあたへ給へり。われ如何にして此めぐみを汝にむくいんや。そは一切を抛ち、世を棄て、修道の生涯を送ることは、萬人に



許さるゝところに非ざればなり。すべて造られし者の仕ふべき汝に、われ仕ふとも、何の讃むべきことかあらん。われ汝に仕ふるとも、讃むべきこと、思ふべきにあらず、却つて斯く貧しき價値なき者を、敢て受け納れて汝に仕へしめ、なんぢの愛したまふ僕等の一人となしたまふことこそ、貴く且つ奇しと我に見ゆるなり。

見よ、我がもてるもの、また汝の用に供するものは、皆なんぢのものなり。然るにわれ汝に仕へず、却つて汝はわれに仕へたまふなり。

見よ、人の用のために汝の造りたまひし天と地とは、汝につかへ、何事にもあれ、汝の命じたまふところの事を、日毎になすなり。而してこれ尙ほ云ふに足らず。汝はまた人に仕へしめんがために、天使等をその位に従ひて定めたまへり。されども凡てのことに超さりて貴きは、汝みづから人に仕ふるを厭はずして、人のために己れを與へんと約束したまひしことなり。

凡て此等の數多の恵みに報いんがため、われは何をなんぢに獻ぐべきや。願くはわれ我が生涯

の日の悉くを汝に仕へ得たらんことを。願くはたとひ一日たりとも汝にむかひて適はしき奉仕をなし得たらんことを。眞になんぢは凡ての奉仕、すべての恭敬、また永遠の讚美を受くべきものなり。まことに汝はわが主なり、而して我は汝の貧しき僕にして、力をつくして汝に仕ふべきものなり、我はまた汝を讚美するに疲るべからざるなり。これ我が望みなり、これ我が願ひなり。而して凡そ我に缺くるところのものは、なんぢ此を補ふを厭ひたまふこと勿れ。

二

なんぢに仕へ、なんぢの爲に凡てのものを輕んずることは、大なる譽れにして、また大いなる誇りなり。そは進んで汝のいとも聖き務めに己れを服せしむる者は、大いなる恩寵を受くべし、また汝を愛するために、肉の凡ての快樂を棄てし者は、聖靈のいとも樂しき慰安を見出すべければなり。なんぢの名のために狭き道に入り、すべて世につける心勞を棄てたる者は、心の大いなる自由を獲ん。



あゝ神に仕ふることは榮しく歡ばしきかな、眞に人の自由となり潔くなるは是によれり。あゝ信仰によりて頼るこの聖き狀よ、これは人をして天使に等しきものとし、神に喜ばれ、悪魔の怖るゝところとならしめ、また凡て忠信なる者より賞讃を受くるに足る者たらしむ。あゝ歡び迎へ且つ常に願ふべき奉仕よ、その報酬は至高善なり、また此によりて永久に存すべき歡喜に達するなり。

### 第十一章 心の願望を省みて節制すべきこと

なんぢ未だ良く知らざる多くのことあり、これを學ぶことは汝に必要ななり。

主よ、それは何ぞや。

なんぢの慾望を全く我が意に適はしむるやうに整るゝこと、また己れを愛することをやめて、我が意をなさんとする熱心者となること是なり。慾望は往々なんぢを燃やしなんぢを激しく追ひ

たつることあり。されど多く汝の動かさるゝは、わが榮光のためなるや、或はなんぢの利益のためなるやを、なんぢ考ふべし。もし我がためなりとせば、我が定むるところ如何を問はず、なんぢは全く満足せん。されど若し汝のうちに少しにても利己のこゝろ潛みをらば、見よ、汝を妨げ汝を壓伏するものは、是なり。

この故に我が勸めを求むることをせずして、豫め抱ける慾望に輕卒に傾かざるやう心すべし。恐らくは、汝は後悔せん、或は最初になんぢの心を惹き、最も善きものとして、なんぢが熱心に追ひ求めたりしもの、汝の厭ふところとならん。そは善しと見ゆる凡ての衝動に直ちに從ふべきにあらず、また苦しき衝動とても悉く直ちに斥くべきにあざればなり。善き努力と慾望とにすらも、往々制限を置くを宜しとす、恐らくは偏見のために、なんぢは心の感亂を招かん、恐らくは自らを治むる力を缺くために、汝は他人の躓きとならん、或は更に、人々の反對によりて汝は忽ち狼狽して倒れん。されど時として汝は猛威をふるひ、なんぢ肉の慾に、雄々しく逆らひ、肉の好むと好まざるとを省みず、寧ろ肯んぜざる肉の欲するところに逆らひて、此を靈に服せしむることを心がくべし。而して肉が凡ての事にむかひて備へをなし、乏しきに満足することを學び



質素なるものに喜悦を見出し、いかに慰めなき時にも、咳くことなきに至るまでは、肉を懲らし、強ひて此に鞭を負はざるべからず。

## 第十二章 忍耐を訓練し、肉慾と争ふべきこと

あゝ主なる神よ、我にとりて忍耐の甚だ必要なるは、わが識るところなり。そはこの世に於ては我等を妨げんとて起るもの多ければなり。即ち平安を得んがため、如何なる企てを立つるともわが生涯に戦ひと悲しみとは盡くすることは能はず。

子よ、汝の云へるが如し。されど誘惑を免れ、或は如何なる困難をも感ずることなき平安をなんぢ求めず、却つて様々の患難に悩まされ、また多くの災難に試みらるゝ時にこそ、平安を見出しせしなりと汝の思はんことを、我は願ふなり。なんぢ若し多くの苦難に堪ふことを得ずと云はば、如何にして煉獄の火に堪へんや。もし二つの禍ありとせば、必ずその輕きものを採るなり。この故に汝は後に永遠の刑罰を免かれんがために、今ある禍を、神のために、靜かに耐へしのは

んと努むべし。

なんぢは此世の人々に苦しみなく、或は苦しみ稀なりと思ふや。たとひ汝いたく奢れる人に訊ぬるとも然らざるを見出すべし。されど汝は云はん、「彼等は多くの快樂を有し、また己が慾に従へり、故に彼等は患難を甚だ重しとせざるなり」と。然り、かれらの欲するところを、凡べて獲たりとするも、能くいつまでも續くべしと汝おもふや。見よ、この世の富者は煙のごとくに消え去り、その過ぎにし歡喜の記念を、一も留めざるべし。否かれらは、尙ほ活くる間に於てすら、苦しみ、疲れ、また恐れのを抱くことなくして、快樂のうちに安んずることなきなり、そは彼等が快樂を飲むところのものより、往々悲哀の刑罰をも受くればなり。その如く汝等は貪りて快樂を求め、これに従ひたれば、耻と苦しみとを受くることなくしては、快樂を受くべからざるは當然なり。

あゝ快樂は如何に短く、いかに虚しく、如何に猥らにして、また卑しきかな。然るに人はいたく酔ひ、盲目となりて此を悟らず、この過ぎゆく世の憐むべき歡樂のために、物いはぬ獸のごと



く、魂の死に馳せゆくなり。

この故に、子よ、なんぢは汝の肉慾に従はずして、己が意を自ら制すべし。自ら主によりて歡喜をなせ。主はなんぢが心のねがひを汝にあたへ給はん。なんぢ若し眞の喜悅を欲し、我によりて愈ゆたかに慰められんことを願はゞ、見よ、すべて世の物を輕んじ、また凡ての卑しき快樂を斷つことに、なんぢの祝福あらん、而して豊かなる慰藉なんぢに加へられん。また汝自らいよいよ造られたる物の凡ての慰安より離るゝに従ひ、ます／＼楽しく力ある慰藉を我のうちに見出さん。

されど最初幾干かの悲哀または戦ひの勞苦なくしては、此等の慰藉を獲ざるべし。舊き生れつきもてる習慣は逆らふべし、されど更に善き習慣によりて全く打ち勝つことを得ん。肉は咬かん、されど靈の熱心によりて汝は此を遏むるを得ん。古き蛇はなんぢを促がして苦しめん、されど祈禱によりて逐ひやるを得ん、然かのみならず、有益なる勤勞によりてなんぢは大いにその近づくを拒ぐを得ん。

## 第十三章 耶蘇基督の模範に倣ひて、

### 低き者は服従すべきこと

子よ。服従より身を退かんと努むる者は、これ恩寵より身を退くなり。また己れひとり利を求むる者は、凡ての兄弟等のもてるものを失ふなり。人もし歡び進んでその長上に服従せずとせばこれ其肉いまだ全く己れに服従せずして、抵ひ咳く微なり。この故に汝もし汝の肉を鞭の下に置かんと欲せば、なんぢの上にとてる者に速かに服従せんことを學ぶべし。そは衷なる人もし荒れ果てざれば、外部の敵に打ち勝つこと一層速かなればなり。なんぢ若し聖靈と相和しをらすとせば、汝自らにとりて汝自らよりも、煩はしく、また兇惡なる敵は、魂にあることなし。なんぢ若し血肉に勝たんと欲せば、己れに對して眞の輕侮のこゝろを抱くこと肝要なり。

なんぢ尙ほ己れを愛すること度を越ゆるがゆゑに、全く己れを他人の意志に委ねることを恐る



なり。されども萬物を造れる全能にして、いと高き者なる我にして、尙ほ汝のために卑<sup>ひく</sup>たりて人に己れを服従せしめたりしに、塵にして無きものなる汝が、神のために己れを人に服従せしむるとも、何の讃むべきことあらんや。我が謙虚によりて汝の高慢を打ち挫かんために、我は凡ての人の中の最も卑しき者、また低き者となれり。

あゝ塵よ、服従することを學べ。なんぢ塵よ土よ、己れを卑くすべし。凡ての人の足もとに跪くことを學べ、おのが意志を打ち挫きて、すべて服従に身を委ねんことを學べ。己れに對しては猛く熱し、高慢をして汝のうちに活くることを許さず、自らいたく卑<sup>ひく</sup>たり、いと小さき者たるを示し、かくて凡ての者をして汝のうへを歩み、街の泥のごとくに汝を蹂躪することを得せしめよ。

虚しき人よ、なんぢに何の泣くべきものありや。汚れたる罪人よ、斯くしばぐ神にさからひ、また數多たび地獄に入るべりし汝、その汝を責むる人々に、なんぢは能く何と答ふべきや。されど汝の魂は我がまへに貴かりしが故に、わが眼はなんぢを恕したり、これ汝をして我が愛を知り、常にわが恵みを感謝せしめ、また汝をして絶えず眞の服従と謙虚とに身をゆだね、まさに受くべき悔りを耐へしのばしめんが爲なりき。

## 第十四章 己が徳を誇ることなからんが爲

### 神祕のれたる審判を想ふべき事

主よ、なんぢは汝の審判を我がうへに轟かし、恐怖と戦慄とを以て、我が凡ての骨をふるはし給へば、わが魂はいたく怕れたり。われは愕きて立ち、而して想へり、もろくの天も汝の眼のまへには潔からざるなりと。なんぢ若し天使をも足らぬ者と見做して、これを恕し給はずとせば、我等は如何になるべきや。星も天より落つ、塵に過ぎざる我は、いかで自ら恃むべきや。賞讃するに足る業をなせし者も深淵に落ちたり、また天使の糧を食らひし者の、豚のくらふ豆殻を自ら嗜むを我は見たり。

この故に、主よ、なんぢ若し聖手を收めたまへば、聖きものなかるべし。なんぢ若し導くことを止めたまはひ、智慧も益するところなし。なんぢ若し防ぐことを止めたまはひ、勇氣も助けよ



ならず。なんぢ若し護りたまはずば、貞潔も安全ならず。もし汝の聖き警護われらの上にあらずば、我等みづからの警戒も益なし。そは我等棄てらるれば、沈みて滅ぶべければなり、されど汝もし我等を顧みたまはゞ、我等は甦りて生くべし。まことに我等は定りなきものなれども、汝によりて強くせられたり、我等は冷やかになれども、汝によりて燃やさるゝなり。

あゝ我は己れを如何に卑しく、また低く思ふべきぞや。われに如何なる善きものありと見ゆるとも、これを輕んずべきぞや。主よ、われ自らの無にして無なること、無にほかならざるを見る時、いかに深くわれは汝の測りがたき審判の下に己れを低くすべきぞや。

あゝ量りがたき重量よ、あゝ際涯なき海よ、そこにて我等が己れに就て識るは、たゞ無なるほか、何ものもあることなし。

されば榮華の隱家はいつくにかある。徳の僭妄はいつくにかある。すべての榮華は、我に對する汝の審判の深淵のうちに呑みこまるゝなり。汝のみまへにありて、凡ての内は如何なるものな

りや。泥塊つちくわはするものつくりに向かひて誇るべきや。まことに、その心を神に委ねし者は、いかに空しき言のために、高ぶることを得んや。

眞理に従はしめられたる者は、全世界と雖も高ぶらすこと能はず。また凡ての希望を神に置きし者は、たとひ凡ての舌おのれを賞讃するとも、動かされざるべし。そは物いふ者も、見よ、凡て無にして、その言の響とともに消え去るなり、されど主の眞理はとこしへに絶ゆることなければなり。

## 第十五章 凡て我等の顧ふところの物に對して

### 如何に爲し如何に云ふべきか

子よ。なんぢ凡ての事に於て斯く云ふべし、「主よ、もし聖旨ならば、これを爲さん。主よ、もし汝の榮光となるならば、なんぢの名に於て、これを爲さん。主よ、此事もし汝に宜しと見え、



また我が益なりと認めたまはゞ、願くは汝の榮光のために此を用ゆることを我にゆるしたまへ。されど汝もし此事われを害して、また我が魂の救ひに益なしと知りたまはば、斯くの如き願望をすべて我より取り去りたまへ」と。

そはたとひ人には正しくして善しと見ゆるとも、願望は悉く聖靈より出づるものに非ざればなり。汝を驅りて此もの或は彼のものを願はしむるは、善き靈なりや、或は悪しき靈なりや否や、また汝の動かされたるは、汝みづからの靈によるや否やを、正しく判断するは難し。多くの人は最初善き靈に導かれたりと見えしも、終りには欺かるゝに至れり。

この故に如何なる願望が心に起こるとも、必ずつねに神を恐れ、へりくだりたる心を以つて、此を願ひもとめざるべからず。殊に己れを空しうし、萬事を我に委ねて云ふべし、「主よ、なんぢは最も善きものゝ何なるかを知りたまふ。これも彼も、汝の善しとしたまふまゝに成したまへ。なんぢの欲したまふことを、汝の欲したまふ毎に、なんぢの欲したまふ時に、與へたまへ。願くは汝をいたく喜ばせまつり、また汝の榮光を増すために、最も善しと汝の知りたまふごとくに我を

あしらひ給へ。なんぢの欲したまふ處に我を置き、而して凡ての事に於てなんぢの聖旨のまゝに自由に、我をあしらひ給へ。われは汝の聖手のうちにあり。我を廻しすゝめ、或は我を廻し歸したまへ。見よ、われは汝の僕にして、何事をも爲さんと備へせり。そは我は己れのためにあらずして、汝のために活きんと願へばなり、また、あゝ、願くは十分に全く斯く活き得人ことを。

### 神の聖意の成就せんことを求むる祈禱

あゝ、恵みふかき耶蘇よ、なんぢの恩寵をわれに與へ、われと共にありて、我と共に働き、また終りに至るまで我とともに忍びたまへ。われに恩寵をたまひて、汝の喜みし、また汝の愛したまふものを、常に望み、願はしめたまへ。なんぢの聖意を我が意とし、我が意は常に汝の聖意にしたがひ、これと全く一致せしめたまへ。我が然りと否とを汝と一ならしめたまへ、而して汝の欲したまふもの、或は欲したまはざるものゝほかを、欲し、或は欲せざる事能はざらしめたまへ。

願くは我をして世にある凡ての物に對して死し、汝のために侮られ、この代に知られざること



を望ましめたまへ。願くは、願ふことを得る凡てのものに優さりて、われを汝のうちに憩はしめ  
また汝のうちに我が心を平安に置きたまへ。なんぢは心の眞の平安なり、汝のみ休息なり。なん  
ぢを離れては凡てのこと辛くして安からざるなり。變はりたまはざる者にむかひて、この平安、  
即ち唯ひとりにして最も高き永遠の善にまします汝のうちに、我は眠りて憩はん。アーメン。

## 第十六章 眞の慰安は唯だ神のうちにのみ求むべき事

凡そ我が慰安のために求め、或は想ひうかべ得るものを、我はこれを此世に求めずして來世に  
求む。そは我れ若しひとりにて世の慰安を悉く受け、またその歡樂を凡て味ひ得たりとするも、  
その永續する能はざることを確かなればなり。

この故に、あゝ、我が魂よ、貧しき者を慰むる者にして、まだへりくだる者の保護者なる神に  
於てのほか、汝は十分に慰めらるゝことなく、また完く力づけらるゝことなし。あゝ、我が魂よ、  
暫く待つべし、神の約束を待つべし、さらば汝は天に於て凡ての善きものを豊かに受けん。なん

ぢ若し誤りて今あるものを求めば、永遠にして天にあるものを失はん。この世のものは此を用ゆ  
べし、慕ふべきは永遠のものなり。なんぢは此世の如何なる善きものにも自ら満足する能はず  
そは汝は此等のものを樂しまんがために造られしに非ざればなり。たとひ汝は造られたる實を悉  
く己がものとなすとも、尙ほなんぢは幸福なること能はざるべし。たゞ萬物を造りたまひし神の  
うちにのみ、汝の全き幸福はあるなり、この世をしたふ愚かなる者に見られ、また讚めらるゝ類  
の幸福にあらず、基督の善かつ忠なる僕の俟ち望むところのもの、また靈につき、心潔くして、  
交りを天に有する者の、時として豫め味ふところのものなり。

人間の慰安は凡て虚しく且つ果敢なし。眞理より心のうちに受くるところの慰安は、福ひにし  
て眞なり。敬虔なる人は何處にも己が慰め主なる耶蘇を伴ひて、彼に云ふ、「主耶蘇よ、何處に於  
ても、また何れの時に於ても、我と共に在したまへ」と。すべての人間の慰安を歡んで棄て去る  
こと、これを我が慰安たらしめたまへ。而して汝の慰藉もし缺くことあらば、なんぢの聖旨と、  
また我が受くる義しき試煉とをして、我が最大の慰安たらしめたまへ。そは汝はつねに責むるこ  
とをせず、永遠にいかりを懷きたまはざればなり。



## 第十七章 凡て我等の心勞を神に委ぬべきこと

子よ。わが好むまゝを汝になすことを我に容せ。われは汝にとりて善きことを知れり。なんぢの思ふところは、人のごとく、多くのことを判断するに、人の性情の勸むるところに據れり。

主よ、なんぢの云ひ給ふことは眞なり。なんぢの我を心にとめ給ふことは、われ自ら己れのために爲す凡ての心勞よりも大なり。そは凡て己が心勞を汝に委ねざる者は、立つこと不安なればなり。主よ、もし我が意志にして能く汝にむかひて正しく且つ定かなるを得ば如何なることにて、汝の聖旨のまゝを我になしたまへ。そは凡そ汝の我になし給ふことは、必ず善からざることなければなり。若しわれ暗黒のうちにあるべきこと聖旨ならば、なんぢは讃むべきかな。また若し我れ光明のうちにあるべきこと聖旨ならば、同じく汝は讃むべきかな。なんぢ若し我を慰むることを厭ひたまはずば、汝は讃むべきかな。また若しわれ患むこと聖旨ならば、とこしへに等しく汝は讃むべきかな。

子よ、なんぢ若し我とともに歩まんと欲せば、斯くの如き態度を採るべし。なんぢは喜びて耐へ忍ぶこと、恰も歡喜に對するが如くすべし。なんぢ喜びて貧窮に處すること、富裕に居るがごとくすべし。

主よ、なんぢの許しを得て我に來たるべきことは、如何なる事にも、汝のために我は欣びて忍ばん。なんぢの聖手より、われは福ひと禍ひ、樂しみと苦しみ、歡びと悲しみの別なく、受けることを願ふ、而して凡て我に起こるところの事にむかひて感謝せん。われを凡ての罪より護りたまへ、さらば死をも地獄をも恐れじ。なんぢは我を永久に棄てず、また生命の書より我を抹し給はざるが故に、如何なる患難わが上に來たるともわれを害することなかるべし。



## 第十八章 基督の模範に倣ひて此世の辛酸

## を靜かに耐へ忍ぶべきこと

子よ。われは汝の救ひのために天より降り。われは止むを得ずしてには非ず、愛にひかれて、なんぢの悲しみを我が身に擔へり、これ汝をして忍耐を學び、咄くことなくして此世の辛酸を忍ばしめんがためなり。それ我には我が誕生の時より十字架上の我が死に至るまで、苦しみを受けざりしことなかりき。われは此世の大なる窮乏に苦しむたりき。われは我に對する怨言をしばしば聞きたりき。われは心靜かに恥辱と誹難とを忍びたりき。われは恩寵に報ゆるに忘恩をもつてせられ、奇蹟を冒瀆にて報いられ、教訓を誹謗にて報いられたりき。

主よ、なんぢは世にいませし時にしのび、斯くして殊に汝の父の命令を成し遂げたまひしがゆゑに、憐むべき罪人なる我も、汝の聖意に従ひて自ら耐へしのび、また我が魂の安寧のために、

なんぢの定めたまふ間、この朽つべき生命の重荷を負ふは、理に適へり。そはこの今の世に重荷として感ぜらるゝと雖も、今やなんぢの恩寵によりて、甚だ益あるものとなり、また汝の模範と汝の聖徒たちの足跡とによりて、弱き者にも堪へ易く、妨げ少なきものと、なされたればなり。また昔しの舊き律法の下にありし時よりは、慰藉は甚だゆたかなり。その時代に於ては天の門は鎖ざれ、天に到る道さへも更に暗く見え、天國を追ひ求むる者極めて稀なりき。然のみならず、その時には義しき者と、救ひを繼ぐべき者等も、なんぢの受難と汝の聖き死の贖ひとの成就する前には、天國に入ること能はざりしなり。

あゝ我はいかなる感謝をなんぢに獻ぐべきや、なんぢは汝の永遠の國に到るべき正しき道を、我と凡て忠信なる民とに示すことを厭ひ給はざりしなり。即ち汝の道を我等は、われらの冠にまします汝のもとに歩むなり。なんぢ若し我等に先立ちゆきて、我等を教へ給はざりしならば、誰か敢て従はんや。あゝ汝の貴き模範を見ざりしならば、遙かうしろに残るもの幾干なりしぞや。見よ、われらは汝の多くの奇蹟と教訓とに就き聞きたりと雖も、尙ほ冷やかなり。われら若し斯くの如き大なる光を得、これによりて汝に従ふことなかりせば、我等は如何になりしぞや。



### 第十九章 害を忍び、眞の忍耐を證明すべきこと

子よ、汝の云へるは何ぞや、なんぢは我が受難および他の聖徒たちの苦難を想ひて、咬くことを止むべし。なんぢは未だ血を流すまで抵抗さかひしことなし。かの甚く忍び、つよく誘惑され、甚だしく惱まされ、さまざまの試練と障碍とを受けたるもの等にくらぶれば、なんぢの苦難は數ふるに足らざるなり。この故に汝の些かなる患難に堪へ易からんがため、汝は他の人々の更に重き禍ひを想ひ起こすべし。而して汝の患難もし甚だ小ならずと汝に見えなば、心せよ、恐らくはこれ又なんぢの忍耐なきに基づくならん。されども、たとひ患難は小なるにもせよ大なるにもせよ、凡て此を耐へ忍ばんと努むべし。

なんぢ更に良く自ら備へして患難にあたらば、なんぢの行すところは愈かしこく、また汝の受くべき報いは更に大なるべし。なんぢ若し此にむかひて熱心に心と習慣とに備へせば、患難に堪ふることもまた容易なるべし。「われは斯くのごとき人の手より、斯くのごとき待遇を受くるを忍ぶ

こと能はず、また我は斯くのごとき類のことを忍ぶべきにあらず、そは彼は我に大なる損害を加へ、また我が嘗て思ひしことなきものを以つて我を誹ればなり。されど他の我が受くべきものと思はるゝものは、甘んじて我は忍ばん」と云ふことなかれ。斯くの如き考へは愚かにして、忍耐の徳をも、また忍耐に冠をあたる者の誰なるかを考へず、却つて人の身分と、受けたる損害とを重く見るなり。

正しと思はれ、また己が意にかなふ者のためのほかは、忍ばずといふは、まことに耐へ忍ぶ者なりと云ふべからず。されど眞に耐しへのぶ人は、己れを悩ます者の、或は長上なるか、或は同僚なるか、或は身下の者なるか、善かつ聖なる人なるか、或は邪惡にして卑しき者なるかを、問ふことなし。却つて受くる患難は、如何なる患難が何時きたるとも、悉く神の聖手より來たるものとして、感謝して受け、而して此を大なる益と見做すなり。そは神のために忍びしことにしてたとひ如何に小なりとも、報いを受くることなくして、過ぎ去るもの、神のまへに有ることなればなり。



この故になんぢ若し勝利を獲んと欲せば、戦ひのために備へすべし。戦ふことなくば、なんぢは忍耐の冠を得ず。なんぢ若し忍ぶことを欲せずば、これ冠をうくることを拒むことなり。されど汝もし冠を得んと欲せば、丈夫のごとく戦ひ、耐へしのぶべし。勞せずしては、安息に到る途あることなく、また戦はずしては、勝を得ること能はず。

主よ、願くは生れながらの心には爲し難しと見ゆることを、汝の恩寵によりて爲し得るものと我になし給へ。なんぢは我が堪へ得ることの極めて些かにして、また微かなる反對に遇ふ時、我が忽ち落膽するを知りたまへり。願くは患難の凡ての煩ひを、汝の聖名のために、我にとりて慕ふべくまた望ましきものとなし給へ、そは汝のために苦しみ惱まざるは、わが魂のために甚だ有益なればなり。

## 第二十章 己が弱きを認むべきこと及び此

### 世の悲惨なること

あゝ主よ、われは己れに逆らひて我が不義を云ひあらはさん、われは我が弱きを汝に云ひあらはさん。

しばぐ、些やかなること我を悲しましめ、また我を落膽せしむることあり。われは勇ましく事を爲さんと志せども、些かなる誘惑の來たる時、直ちに大いに窮するなり。往々大なる誘惑は、極めて些かなることより生ず。われ自ら正に安全なりと思ひ、少しも豫期せざる時に、時として一陣の風によりて、自らの殆んど覆さるゝことあるを我は見らるなり。

この故に、主よ、わが賤しき状態と我が弱きとを見そなはせ給へ、これ皆なんぢの知りたまふところなり。願くは我を憐みて泥ひぢのなかより我をたすけ出だしたまへ、これ我を此うちに粘かし



めず。われを全く棄て置かざらんがためなり。われは甚く躊躇きて、我が情慾に抵ふこと弱きがために、しばぐ逡巡し、また汝のみまへに自ら恥づるなり。而して我は全く譲りしにはあらざれども、この攻撃は我にとりて煩はしく、且つ惱まし、また斯く日々戦ひのうちに生くるは甚だ厭はしきことなり。憎むべき怪しき想ひの我に常に馳せ入ることの、その出で去るよりも甚だ容易なるを以つて、我が弱きことを汝は知れり。

あゝイスラエルのいとも強き神よ、忠信なる魂を熱烈に愛する者よ、あゝ願くは、なんぢの僕の勞苦と悲哀とを顧みたまへ、またその爲す凡ての事に於て傍に立ちたまへ。天よりの勇氣を以つて我をつよめ給へ、これ舊き人、即ち未だ靈に十分服従せざる悲惨なる肉われを支配することなからんが爲なり。此がために我は此いとも悲惨なる世に生息するあひだ、戦はざるべからざるなり。

あゝ患難と不幸の絶ゆることなく、凡てのもの陥穽と敵とに充つる此世は、そもく如何なる世なるぞや。そは一の患難もしくは誘惑しりぞく時、他のもの來たるなり、否最初の戦ひの尙ほ續きをる時、豫期せざるに他の多くのもの相繼ぎ來たるなり。斯く多くの辛酸を有し、また斯く

多くの災難と不幸とに圍まるゝ生涯を、いかで愛するを得んや。斯く多くの死と、疫病とを生むところのものは、いかで生涯と稱せらるゝを得んや。

しかも此を愛し、多くの人は此うちに己れを悦ばさんと努むるなり。しばぐ世は虚妄なりとて誹らる、而も肉の慾望は大なる力を以つて支配するがゆゑに、容易には棄てられざるなり。されど或るものは我等をして世を愛せしめ、他のものは世を輕んぜしむ。肉の慾、および生命の誇りは、我等をして世を愛せしむ。されど當然此等の慾に伴ふべき苦痛と不幸とは、世を憎み、これを厭ふ心を生ぜしむ。

されど、あゝ、惡しき快樂は、世に身を委ねたる人の心を壓服し、かくて荆棘の下に偃すことを、快樂と見爲すに至れり、そは神の樂しさと徳に伴ふ内心の嬉しさとを見ることも味ふこともなければなり。されど全く世を輕んじ、聖き訓練のもとに神に従ひて生きんと努むる者は、まことに世を棄てし凡ての者に約束したまひし神より出づる樂しさを良く知れり。また彼等は世の迷ひの如何に甚だしくして、その歎かるゝこと如何に多端なるかを、一層明らかに見るなり。



## 第二十一章 凡ての善き物と賜とにまさりて

## 神のうちに憩ふべきこと

—

あゝ我が魂よ、萬物にまさりて、また萬物のうちに、なんぢ常に主にありて憩ふべし、そは彼は聖徒の永遠の安息にましませばなり。

あゝいとも慕はしくして愛しみ深き耶蘇よ、凡ての造られたる物にまさりて、凡ての安寧と美とにまさりて、凡ての榮華と名譽とにまさりて、凡ての権力と威嚴とにまさりて、凡ての智識と巧妙とにまさりて、凡ての富と技藝とにまさりて、凡ての喜悅と歡喜とにまさりて、凡ての名聲と賞讃とにまさりて、凡ての樂しみと慰安とにまさりて、凡ての希望と約束とにまさりて、凡て

の功績と慾望とにまさりて、汝の能く與へ願ちたまふ凡ての賜物と愛顧とにまさりて、心の受けて感じ得る凡ての喜悅と歡樂とにまさりて、最後に、天使と天使達とにまさりて、また凡ての天の軍勢にまさりて、凡ての眼に見ゆるものと見えざるものとに優さりて、而してわが神よ、汝にあらざる凡てのものにまさりて、汝のうちに憩ふことを我にゆるし給へ。

そは、あゝ我が神よ、なんぢは凡てのものに優さりて最も善くまし／＼給ふ。汝のみいと高く汝のみいと力強く、汝のみいたく足りて、いたく充ちたまふ、汝のみいと慕はしくして慰藉に充ち、汝のみいたく愛され、また愛し、汝のみ萬物にまさりて、いと貴く且つ榮えあり。善きもの、即ち今あるもの、ありしもの、後にあるべきもの、總てみな結ばりて、汝のうちに全し。この故に、なんぢ如何なるものを汝に與へ給ふとも、汝自らのほかの凡てのものは、小にして満足にあたはず。また汝みづから啓示し、或は約束したまふとも、汝みづからを見ることなく或は十分に所有し得ざれば、同じく然るなり。そは汝が心は、汝のうちに、憩ひ、凡ての賜物を超え、凡ての造られたる物を過ぎ超ゆるにあらざれば、眞に憩ふことなく、また全く満足すること能はざればなり。



あゝ我が魂の愛する新郎<sup>はなむこ</sup>、なんぢ、我が愛するいと潔き者、なんぢ凡て造られたる者の主なる耶蘇基督よ、願くは我をして汝のもとに翔り去り、汝のうちに憩はしめんがため、眞の自由の翼をわれに與へたまへ。

あゝ主なる我が神よ、われ何れの時にか、全く心やすらかに、汝の如何ばかり慕はしきかを見ることを容されんや。いづれの日にか我れ十分こゝろを汝にむけ、かくて汝を愛するがために、自らを覺えず、凡ての官能と度とを超え、凡ての人の知らざる狀に於て、たゞ汝のみを感じるを得んや。

されど今われは屢なけき、憂ひをもつて我が不幸を忍ぶなり。そは多くの禍ひ、この不幸の谿に於て我に起こり、しばし我を煩はし、悲しくし、疊らし、しばし妨げて惑はし、誘ひて惱

まし、かくて我は自由になんぢに近づくこと能はず、また祝福されし靈のために常に備へらるゝところの、樂しき抱擁をうくること能はざればなり。

願くは我が嘆きと、地上に於ける我が多くの荒敗とをして、汝の心を動かしめよ。あゝ永遠の榮光の輝きにして、旅人<sup>たびびと</sup>なる魂の慰安にまします汝耶蘇よ。わが聲を出さざる舌は汝に聞かれ、わが沈黙はなんぢに語るなり。

いつまで我が主はその來たることを延ばしたまふや。願くは主の貧しき者なる我に來りて、我を歡ばせたまへ。願くは聖手をのべて、憐むべきものを、凡ての困難より救ひたまへ。來たりたまへ、來たりたまへ、なんぢ在さずば、一日も一時も喜ばなし、そは汝はわが歡喜にして、汝いままさずば我が食卓は空しければなり。

なんぢの聖顔の光によりて我を養ひ、われに自由をあたへ、親しみある貌を我にむけ給ふに非ざれば、われは不幸なるものにして、繋がれて桎梏を負ふ者といふべし。



人々は汝のかほりに其好むところのものを追ひ求めん、されど我に於ては、たゞ我が神、わが希望、わが永遠の救ひなる汝のほか、いかなるものをも悦ばざるべし。なんぢの恩寵ふたゝび歸りてなんぢ我が内心に語りたまふまで、われは黙せじ、また祈禱も止めじ。

見よ、われ此處にあり。なんぢ我を呼びしにより、見よ、われは汝に來たれり。なんぢの涙と汝の魂の願ひ、なんぢの心の謙虚と悔恨とは、我を動かして汝に到らしめたり」と。

而して我は云へり。「主よ、われは汝に呼ばり、なんぢを樂しまんことを願へり、なんぢの爲に進んで凡ての物を斥けんとするなり。それ汝は我をして汝を求めしめんがために、最初に我を起こしたまへり。この故に、主よ、なんぢは讃むべきかな、なんぢの慈悲のゆたかなるによりて汝の僕にこの恵みを示し給へり」と。主よ、なんぢの僕は汝のまへに於て、また何をか云はん、たゞ汝のみまへに自らを卑くし、塵につき、常に己が不義と汚れとを想ひ起こすほかぞなき。そは天地のあひだの凡ての奇しきものうちに、汝にひとしきもの無ければなり。汝の聖意は甚だ

善く、なんぢの審判は正しく、而して汝の攝理によりて宇宙は支配せらる。この故に、あゝ父の智慧よ、なんぢに讚美と榮光とあれかし。わが口も、我が魂も、また凡ての造られたる物もともになんぢを讚めたへん。

## 第二十二章 神の多くの恵みを憶ゆべきこと

主よ、わが心をなんぢの律法にむかひて開き、我を教へて汝の誠を歩ましめたまへ。われに汝の聖旨を悟り、また大なる尊敬の心と熱心なる思慮とをもて、なんぢの恵みを、總べて又おのの別に、想ひ起こすことを容したまへ、これ此の後われ適はしく汝に感謝をさしけ得んがためなり。

されど我は最も小さきものに對してすら、當然さへぐべき感謝と讚美とを、汝になし得ざるものなることを知りて懺悔す。われは凡てなんぢの恵みの最も小なるものよりも劣れるものにしてわれ汝の稜威を考ふる時、その大なるに我がこゝろは昏迷するなり。すべて我等の魂にあるもの



肉體にあるもの、また凡そ外部に内部にあるもの、自然に、或は自然を超えて有するものは皆、なんぢの恵みなり、而して皆なんぢを稱へて、恵みふかく、憐憫に富み、いつくしみに富みたまふ者となせり。われらは凡ての善き物をなんぢより受けたりき。

たとひ或る者は多く受け、或る者は少く受くるとも、尙ほ凡てのものは汝のものなり、而して汝によらずしては、最も些かなるものすらも得ること能はず。

人よりも大なる祝福を受けし者も、己が功績を誇るべからず、また人々のうへに己れを擧げ、受くること少き者にむかひて勝ち誇るべからず。そは己れに歸すること最も少く、感謝するに最も卑<sup>へ</sup>くだりて熱烈なる者こそ、最も大にして最も善き者なればなり。また自らを凡ての人のうち最も賤しきものと思ひ、自らを最も足らざる者なりと認むる者こそ、更に大なる祝福を受くるに最も適はしき者なれ。

されど受くること少き者も、心を落し、或は眩<sup>くら</sup>くことなけれ、また己れよりも豊かなる者を猜

むべからず、却つて心を汝にとめ、汝のめぐみを甚くたいふべし。そは汝は人を偏り見ることなく、なんぢの賜物を斯く豊かに斯く惜しみなく、斯く快く與へたまへばなり。

よろづの物は汝よりいづ、そのため汝はよろづの物に於て讃めらるべきなり。なんぢは各の人に與ふべきものを知り給へり。而して何故にこの者は多く受け、彼の者は少く受くるかを判ずるは、我等の爲すべきところに非ずして、汝の爲したまふところなり、なんぢは各の人の功績を精確に定めたまふ。

この故に、主なる神よ、外より見、また人々の考へによれば、賞讃と誇りとに慣ひすと見ゆる才能の多くを有せざることをつて、われは大なる慈悲とすら思ふなり。されば人はおのが身の窮乏と卑賤とを思ふ時、これに對して決して憂ひ、悲しみ、落膽の感情を起さず、却つて大なる慰安を覺えて歡ぶべし。そは、あゝ神よ、なんぢは貧しき者、卑しき者、また此世に輕んぜらるゝ者を選びて、なんぢの親しき友とし、伴侶としたまへばなり。



證人はなんぢの使徒自らなり、汝はかれらを全地に王たらしめ給へり。而もかれらは咬くこと無くして世に活き、いたく卑<sup>へ</sup>だりて、單純に、凡て悪意と欺満とより自由にして、實になんぢの聖名のために辱しめらるゝことを喜び、また世の厭ひ避くるものを、大なる情愛もて抱きたりき。

この故に、人もし汝を愛し、汝の恵みをさとり時に、己れに對する汝の聖旨と、なんぢの永遠の定めに従ふことにまさりて、歡ばしきものあることなし、此によりて満足し慰められ、みづからの最小の者たることを喜ぶこと、人が最大の者たることを欲するが如くなるべし。また末座にありて安んじて満足すること、恰も首席にあるが如く、名もなく譽れもなくして侮られ無視さるゝを喜ぶこと、恰も人にすぐれて尊ばれ、世にありて人よりも大なるを喜ぶが如くすべし。そは汝の聖旨と汝の榮光を愛することは、他の凡てのものにまさりて重んずべく、また既に受けし恵み、もしくは受くべき凡ての恵みにまさりて、強く彼を慰め、彼を喜ばせばなり。

## 第二十三章 大なる平安を齎らす四つの事に就て

子よ、今われは平安と眞の自由との道をなんぢに教へん。

主よ、願くは汝の云ひ給ふがごとく爲したまへ、これを聞くこと我が喜びなればなり。

子よ、己が意志を行すよりは、他人の意志を行さんことを學べ。

多く有たんよりは、寧ろ少く有たんことを常に志すべし。

常に末席につき、凡ての人の下にあらんことを求めよ。

常に神の聖旨の汝のうちに全く成就せんことを願ひて祈るべし。

見よ、斯くのごとき人こそ、平安と安息の地に入るなれ。



主よ、汝のこの短き教は、その中に含むところ極めて完全なり。言は些かなれども、意味は豊かにして、果に富めり。そはわれ若し此を忠實に守ることを得ば、斯く容易くは亂さるることなかるべければなり。即ち自ら不安にして心重きを覺ゆる毎に、われは此教訓より離れをれるを見出すなり。されど凡てのことを爲すを得、また常に我が魂の利益を望みたまふ汝よ、なんぢの恩寵をわれに増し加へ、我をして汝の言を成し遂げ、わが救ひを完うするとを得せしめたまへ。

### 邪念を防がんがための祈禱

主なる我が神よ、なんぢわれに遠ざかり給ふこと勿れ。わが神よ、願くはわれを顧み助けたまへ。そは様々の思ひと大なる恐怖とが我にさからひ起ちて、わが魂をなやませばなり。われは如何にして害を受くることなくして此を通過すべきや。われは如何にして此を打ち挫くべきや。

彼は云ひたまへり、「われ汝のまへに行きて地の大なる者等を卑くすべし。われは牢獄の扉をひらきて、隠れたる祕密を汝に示さん」と。

主よ、なんぢの云ひたまへる如くに爲し、凡ての邪念をして汝の聖顔のまへより逃れしめ給へ。すべての患みの時に、なんぢに通がれ、なんぢに依りたのみ、我が衷心より汝を呼びもとめ、而して忍びて汝の慰藉を待つこと、これ我が希望、また我が唯一の慰安なり。

### 心の照らされんことを求むる祈禱

あゝ恵みふかき耶穌よ願くは衷なる光の輝きをもて我を照らし、わが心の住處より暗黒を拂ひつくし給へ。なんぢ我が多くの迷へる思ひを抑へ、烈しく我を攻むる諸の誘惑を打ち破りたまへ。なんぢ我がために強く戦ひて、悪しき獸、即ち人を誘ふ肉の慾を征服したまへ、これ汝の力によりて平安きたり、汝の豊かなる讚美の、汝の聖殿すなはち潔き良心のうちに反響せんがためなり。風と嵐とをいましめ、海に「鎮まれ」と云ひ、北風にむかひて吹く勿れと云ひ給へ、さらば大なる平安あらん。なんぢの光と汝の眞理とを放ちて、地上にかゝやかし給へ、そは汝われを照らし給ふにあらざれば、我は形なく虚しき地なればなり。上より汝の恩寵をそゝぎ、天の露をもてふ



が心を潤ほし、地のおもてに水漑ぐため敬虔の流れをそなへ、かくて善き卓れたる果を結ばしめたまへ。

なんぢ罪の荷のために壓へらるる我が心を擧げ、わが慾望をして悉く天の物にむかしめ給へ。これ天の幸福の楽しさを味ひて、地の物に就て想ふことの我に厭はしくならんが爲なり。願くは凡て造られたる物の過ぎゆく慰安より我を抜きとりて救ひたまへ、そは造られし物にして我が慾望を十分に充たし、或は慰め得るもの一もなければなり。

願くは離るべからざる愛の絆をもて我を汝みづからに結びたまへ。そは汝を愛する者を満足せしめ得るは、汝のみにして、汝を離れては凡てのもの空しければなり。

## 第二十四章 好奇心の心より他人の生涯に就て

### 穿鑿するを避くること

子よ、好奇心の心をいやくこと勿れ、また益なき心勞をもて自らを煩はすこと勿れ。此も彼も汝に何の關りあらんや、汝はわれに従へ。そは彼の人斯く斯くの狀にあるとも、或は此人斯く斯くの言を發するとも、なんぢに何の關りあらんや。なんぢは他人のために答ふるに及ばず、たゞ己れの事を陳ぶべし。されば何故になんぢは自らを煩はすぞや。

見よ、われは凡ての人を知り、日の下に行はるゝ凡ての事を見、各の人の狀と、その思ふところ、願ふところ、および其志の向かふところを識れり。この故に凡てのことを我に委ぬべきなり。而してなんぢは自ら十分平安を保ち、不安なる者をば、その欲するまゝに不安ならしめよ。凡そその爲せしところ、云ひしところの事は、皆その人に歸り來るべし、そは我を欺くこと能はざれ



ばなり。

大なる名の影、多くの人々との親しき友情、人々の私なる情愛を、得んと思ふことなかれ、そは此等のものは心を亂し、大いに心を暗くすればなり。

なんぢ若し熱心に我が來たるを待ち、我がために汝のこゝろの扉をひらかば、われは歡びて我が言をなんぢに述べ、わが奥義をなんぢに示すべし。未來をのぞみ、醒めて、祈り、すべての事に自らへりくだるべし。

## 第二十五章 心の確乎たる平安と靈の眞の

### 進歩とを得る道は如何

子よ。われは云へり、「われ平安をなんぢらに遺す、わが平安を汝等にあたふ、わが與ふるは世

の與ふる如くならず」と。

平安は凡ての人の願ふところなり、されど凡ての者は眞の平安にかゝるものに、心をとめざるなり。わが平安は心へりくだりて柔和なる者と共にあり。なんぢの平安は多く耐へ忍ぶことにあり。なんぢ若し我に聞き、我が聲に従はば、大いなる平安をうけん。

主よ、われは何をなすべきや。

凡てのことに於て汝の爲すところ、また云ふところを自ら慎しみ、而してたゞ我をのみ悦ばすことに、汝の全心を向け、我のほか何ものをも願ひ求むることなかれ。而して他人の言または行ひに就ては、何事をも軽々しく審くことなく、また汝に委ねられざることに関ること勿れ。さらば汝は煩はさるゝこと稀れにして、或は殆んど無きに至るべし。されど決して如何なる不安をも感ぜず、また心もしくは肉體に如何なる患みをも受けざること、この世にては望むべきあらず、たゞ永遠の安息の狀に於て望むべきなり。



この故に、なんら若し少しの重壓をも感ぜずとも、眞の平安を見出だせりと思ふこと勿れ。またなんぢ若し如何なる敵にも惱まされずとも、すべて安しと思ふこと勿れ。また凡てのこと汝の願ひのごとく成るとも、完全に達したりと思ふこと勿れ。なんぢ若し大なる敬虔と快感とを覺ゆるとも、自らを高しと思ふことなく、或は自ら特に愛せられをりとも思ふこと勿れ。そは眞に徳を愛する者は此等のものによりて知られず、また人の歩進と完全とは、此等のものに據らざればなり。

さらば、主よ、何處にこれを得べきや。

心をつくして己れを神の聖旨にゆだね、小事にも大事にも、現在に於ても永遠に於ても、己れの利を求めざること是なり。斯くて萬事を等しき衡にて量り、順境にも逆境にも、常に感謝し、貌を變ふること勿れ。

なんぢ若し勇ましく、望みて忍び、内心の慰安の退きたる時にも、尙ほ更に大なる苦難に堪へんために、なんぢの心を備へせば、また自らを義として、斯くの如き患難、もしくは斯くの如き大なる患難を受くべきに非ずと考へず、却つて凡て我が定むることを正しとなして、我が聖き名を讚美せば、即ちなんぢは眞にして正しき平安の途を辿るなり、而して歡喜をもて再び我が顔を見んと汝の希望は搖ぐことなかるべし。

されど汝もし己れを十分輕んずるに到らば、即ち知るべし、汝のごとき旅人の受け得るほどの豊かなる平安をうくることを。

## 第二十六章 自由なる心の尊さと、速かに此を得るは

讀書にあらず、卑れる祈禱によること



一  
主よ、己が心を天にあるものを思ふことより決して弛るめず、また感ずることなき人の如くならず、自由なる心の特権、即ち造られたる物に、正しからざる情愛をもつて縋ることなきが故に多くの心勞の眞中たんなかを、恰も心勞なきが如くに過ぎゆくこと、これ全き人の務めなり。

## 二

わがいとも恵みふかき神よ、われは汝に懇願しまつる、願くはこの世の心勞より我を守りたまへ、恐らくはわれ此に捉はれ過ぐべければなり。肉體の多くの止みがたき必要より我をまもり給へ、恐らくは我は快樂に捕へらるべければなり。魂のかふむる凡ての障碍より我を守りたまへ、恐らくは患難に打ちひしがれて、我は覆さるべければなり。われは世の虚妄の力をつくして追ひ求むるところのものに就て語らず、たゞ朽つべきもの、共に有する呪ひによりて、なんぢの僕の

魂を壓服して妨げ、かくて其願ふが如くに 屢靈の自由に入るを得ざらしむるところの憐ましき 刑罰に就て語るなり。

## 三

あゝ我が神、なんぢ云ひつくし難き甘美よ、願くは永遠のものを慕ふことより我を遠ざけ、悪しき方法により、眼前の歡ばしきものを示すことによりて我を己れに誘ふところの凡ての肉の慰安を、我に苦きものとなしたまへ。あゝ主よ、我をして肉と血とに負けしめ給ふなかれ、負けしめ給ふなかれ。世と其短き榮華とをして、我を欺かしめ給ふこと勿れ。悪魔と其奸計とをして我が踵をすくはしめ給ふこと勿れ。抵ふ力と、堪ふる忍耐と、撓まざる決意とを我に與へたまへ。

世の凡ての慰安にかへて、なんぢの靈のいとも妙なる膏油を我に與へたまへ。また肉の愛に代へて、汝の聖名を慕ふ愛をそゝぎ入れたまへ。



見よ、食物、飲料、衣服、その他凡て肉體を支ふるに必要なものは、熱心なる靈にとりては重荷なり。願くは我をして斯くの如き營養物の用を節し、度に過ぎて、煩はしく此を欲することなからしめ給へ。

肉體は保養すべきがゆゑに、凡てのものを棄て去るは正しからず。されど贅澤と奢侈とを求むることは、聖き律法これを禁ぜり。そは我等もし然かせば肉は、靈にむかひて逆らふべければなり。此等のことに就て我はなんぢに懇願す、願くは汝の聖手われを導き、我を教へ、我をして度を過ぎざらしめ給へ。

## 第二十七章 至高善を獲るに最も妨げとなるは

### 私愛なること

子よ。なんぢは一切を獲んために、一切を棄てざるべからず、而て一切私心を抱くべからず。

己れを愛することは、世に於ける何ものよりも、なんぢに有害なりと知れ。なんぢの抱く愛と情愛とに従ひて、物の汝に纏ふこと、或は多く或は少し。なんぢの愛もし純潔にして端正ならば、なんぢは物の束縛より自由ならん。なんぢの有し得ざるものを食ふこと勿れ。なんぢの妨げとなり、内心の自由を奪ふがごときものを、有すること勿れ。

凡そ汝の欲し得るところのもの、また有し得るところのものを携へて、なんぢの心の底より、汝みづからを我に委ねざるは、奇しきことなり。何ゆゑに汝は虚しき憂ひをもつて自ら憔悴るや。何ゆゑに汝は無川の心勞によりて波るや。我が善き志にたよれ、さらば汝は害を受くることなからん。

なんぢ若し尙も善く己れの利益と快樂とのために、此のもの或は彼のものを求め、また此處あるひは彼處にあらんことを願はば、決して安らかなることなく、心の煩ひより免るゝこと無かるべし。そは物には凡て缺けたるところあり、また何處にも汝に逆らふものあるべければなり。



されば、人の安寧は、人の獲得し、或は蓄積する外部のものに存せず、却つて此を軽んじ、全く心よりこれを根絶するにあり。而して此は利得と富とに就て眞なるのみならず、また名譽をたひ、虚しき賞讃を欲することに就ても然るなり、凡て此等のものは、世と、もに過ぎゆくものなり。

もし靈の熱心を缺かば、いかなる處も安全ならず。もし汝の心の狀にして確かなる基礎を有することなくば、求めて得たる平安もまた長く保たざるべし、即ちなんぢ確く我のうちに立つにあらざれば、たとひ汝は變はることあるとも、自らを善くすること無かるべし。そは穢運起りて汝これを容るれば、嘗て汝が逃げ去りしところのものに遇ひ、其他のものにも遇ふべければなり。

### 潔き心と天の智慧とを求むる祈禱

あゝ神よ、なんぢの聖靈の恩寵によりて我を強めたまへ。力をたまひて我が哀なる人を強くし、凡て無益なる心勞と苦惱とを我が心より除き、賤しきこと貴きことを問はず、如何なるものに對

する様々の慾望のためにも、曳き廻さるゝことなく、却つて凡てのものを過ぎゆくものと見なし、わが身もまた此と共に過ぎゆくものと見なさしめ給へ。そは日の下にながらふもの有ることなくみな空にして、また靈の苦悶なればなり。あゝ斯く此を見なす者は如何に賢きかな。

主よ、われに天の智慧をあたへ、斯くて我をして萬物にまさりて汝を味ひ愛し、他の凡ての物の今あるは、汝の智慧の掟によるものなるを悟ることを學ばしめ給へ。われに諂ふものを慎みて避け、われに逆らふ者に耐へ忍ばしめたまへ、そは言のさまざまの風に動かされず、偽りへつらふ妖婦に耳を傾けざるは、これ大なる智慧なればなり。斯くの如くにして我等はわれらの始めたる道を安らかに進みゆかん。

### 第二十八章 誹る者の舌に對して

子よ。人もし汝に就て惡意を抱き、なんぢの聞くを好まざることを云ふとも、これを憤ふること勿れ。なんぢは自らを惡しと定め、己れよりも弱き者あることなしと思ふべし。



なんぢ若し衷なる生涯を送らば、過ぎゆく言に大いに心をとめざるべし。禍ひの時に沈黙し、内心に於て我に己れを向け、人の批判によりて煩はさるゝことなきは、小さからざる智慧なり。

なんぢの平安をして人々の舌の上にあらしむること勿れ、そは彼等なんぢを評して善しとなすも悪しとなすも、その爲になんぢの人となり 變はることなければなり。眞の平安と眞の光榮とは、何處にありや。我にあるにあらずや。而して人を喜ばすことを求めず、また人の意にさからふことを恐れざる者は、大なる平安を受けん。

すべて心の不安と官能の惑亂とは、濫りなる愛と空しき恐怖とより生ずるなり。

## 第二十九章 患難來たる時は神を呼び求め

### 且つ感謝すべきこと

あゝ主よ、なんぢの聖名は永久に讃むべきかな。そはこの誘惑と患難との我に來たるは、汝の聖意なればなり。われは此を逃がるゝこと能はず、たゞ必ず汝に逃げ行かざるべからず、これ汝われを助けて、これを我が益となし給はんがためなり。

主よ、われは今患難のうちにおいて、わが心は安らかならず、そは我は今この苦難によりて甚だしく悩まされるべしなり。されば今、愛する父よ、われ何を云ふべきか、われは窮迫の間に挟まれたり、願くは此時より汝われをすくひ給へ。されど是がために我は大いに卑くせられて、なんぢに救はれ、斯くてなんぢ崇められ給はんがために、我は此時に遇ひしなり。主よ、願くは我を救ひたまへ、そは我のごとき憐むべき者は汝によらざれば、何をか爲し得んや、何處にか行き得



んや。あゝ主よ、願くは今一たび我に忍耐を與へたまへ。わが神よ、われを助けたまへ、さらば如何に甚だしく苦しめらるゝとも、我は恐れざるべし。

而して今、此等の我が患難の眞中まなかにありて、われは何をか云はんや。

主よ、聖意のまゝに成したまへ、われは正に斯く惱まされ、抑壓せしめらるべきものなり。まことに、我は此を忍ぶべきなり、あゝ願くは嵐すぎ去りて、凡てのもの更に善くなるまでは、われ此に耐へ忍び得んことを。されど、あゝ、わが神、わが慈悲よ、なんぢの全能の聖手は、嘗てしばしば我に爲したまひしが如く、この誘惑を我より取り去り、その暴虐をやはらげ得たまふなり。かくて我は全くは沈まざるべし。而して此事いよくわれにとりて爲し難きに從ひ、汝にとりては、いと高き者の右手を斯く變ふことは、ますます容易なるなり。

### 第三十章 神の助けを求め恩寵の回復を確信すること

子よ。われは患難の日に汝に力をあたふる主なり。汝安らかならざる時には、我にきたれ。

なんぢが祈禱にむかふことの遅きこと、これ主として天の慰藉を妨ぐるところのものなり。そは汝は熱心に我に乞ひねがふ前に、しばしば多くの慰安をもとめ、外部のものを以つて自らを養へばなり。茲をもつて、我の我を望む者を救ふ者なること、また我を離れては、力ある助けもなく、有益なる勸告もなく、永續する醫療もなきことを、なんぢの悟るまでは、凡てのこと殆んど汝を益することなきなり。されど今嵐は過ぎたれば、勇氣をいだし、我が慈悲の光によりて、なんぢの氣力を新たにせよ。そは我は凡てのことを只に完全に回復するのみならず、豊かにし、且つ測りがたきまでに回復せんとて近くにありと、主いひたまへばなり。

われに何の爲し難きことあらんや。或は我は云ひて行はざる者のごとくならんや。汝等の信仰はいづこに在りや。堅く揺ぐことなく立て、ながく忍びて大膽なれ。時至りて慰安なんぢに來たらん。我を待ちのぞめ汝われ來たりて汝を癒やさん。



なんぢを害しむるものは誘惑なり。また汝を愕かすものは空しき恐怖なり。未來の杞憂に對する心勞はなんぢに何を齎らすぞや。悲哀に悲哀を重ねるのみにあらずや。一日の苦勞は一日にて足れり。或は起らずして過ぎ去るべき未來のことに就て、悩むことも喜ぶことも、共に虚しくして益なきことなり。されど人は斯くの如きたぐひの妄想に迷はざるものにして、仇の囁やきによりて斯く容易に誘ひ去らるゝは、勇氣の未だ少きしるしなり。そは彼はなんぢを偽り欺くためには、その關するところの眞理なりや、或は偽りなりやを問はず、また汝を覆すためには、眼の前のものを慕ふ愛をもつてすべきか、未來の恐怖をもつてすべきかを問はざればなり。

されば汝等の心を騒がすなかれ。また恐るゝなかれ。我を信じ、我が慈悲により頼むべし。なんぢ自ら我よりいと遠しと思ふ時、しばしば我はいと近し。なんぢ殆んど凡てのもの失はれたりと思ふ時、往々最も大なる報酬を獲べき機會甚だ近くにあることあり。事なんぢに逆らひて起る時、萬事は失はれたるに非ざるなり。

瞬時の感情によりて審くこと勿れ。何處より、如何なる憂ひ來たるとも、それに固着すること

なく、また汝の頭を擧ぐべき望みは全く去りしごとくにして、此を迎ふること勿れ。たとひ暫らくの間われ汝に患難をおくり、若しくは汝の願へる平安を取り去ることあるとも、自ら全く棄てられたりと思ふことなかれ。そはこれ天國に至る道なればなり。また凡てのことを汝の願ひのまゝに爲すよりも、試練に悩まざるゝは、汝および凡て我が僕等にとりて、益多きこと疑ひなし。

われは汝の秘れたる思ひを知れり、そは汝が棄てられて、樂しき味を時として味ふことなきはなんぢの救ひのために甚だ有益なればなり、これ汝が或は汝の繁榮のために高ぶりて、自らに詔び、自らにあらざるものを自らとなさんことを恐るゝがゆるなり。

我が與へたるものは、われ此を取り去ることを得、また我が意にかなふ時は、われ此を再び返すことを得。われ物を與へたりとするも、その物は我がものなり。われ物を取り去るとも、汝のものを取り去るにあらず、そは凡ての善き賜物と凡ての全き賜物とは、我がものなればなり。

われ若し憂ひ、または凡そ如何なる十字架を汝におくるとも、怨むことなかれ、また心を失ふ



ことなかれ。われは速かに汝をおこし、すべて汝の患難を歡喜に變ふることを得ればなり。されど我れ斯く汝をあしらふ時も、われは尙ほ正しくして、また大いに讚美せらるべきものなり。なんぢ若し慧く、また物を見ること正しからば、なんぢの試練のために決して落膽して哭くことなかるべく、却つて歡びて感謝すべし、然り、われ悲哀をもつて汝をくるしめて、假借せざるを、特に汝の歡こころとなさん。

「父の我を愛したまひし如く、われも汝らを愛す」と、我はわが愛する弟子達に云へり。まことに我はかれらを此世の歡樂におくらずして、大なる争闘におくり、榮譽におくらずして、悔あはれにおくり、安逸におくらずして、苦勞におくり、安息におくらずして、忍びて多くの實を結ばしめんがために送れり。子よ、なんぢ此等の言を憶ゆべし。

### 第三十一章 凡て造られたる物を輕んじ

#### 造主を見出すべきこと

あゝ主よ、われ若し人または凡て造られたる物に妨げられざる域に達すべしとせば、大いに我は尙ほ更に大なる恩寵を要するなり。そは何物かわれを過むるあひだ、われは自由になんぢに翔りゆくを得ざればなり。自由になんぢに翔りゆかんことを望みし者いへり「願くは鴿のごとく翅のあらんことを、さらば我れとびさりて平安やすきをえん」と。

誰か眼たゞしき者よりも安らかならんや、また誰か地上の何物をも望まざる者よりも自由ならんや。この故に人は凡ての造られたるものを超えて、身を擧げ、全く己れを棄て、心の恍惚のうちうちに立ち、造られたる物のうちには、萬物の造主なる汝にたぐふべきものなきを見るべきなり。また人は凡て造られたる物より離るゝにあらざれば、自由に己が心を神のことに留むること能は



ざるなり。

茲をもつて瞑想する人の稀なるは、亡びゆくところの造られたる物より如何にして全く己れを離れしむべきかを知る者の稀なるに由るなり。これを得んがためには、魂を高め、魂を越えてゆかしむる大なる恩寵を要するなり。而して人もし靈に於いて高く擧げられ、凡ての造られたる物を離れて、全く神と一致するにあらざれば、たとひ如何なることを知り、如何なるものを有するとも、甚だ重んずるには足らざるなり。唯一にして無限なる永遠の善を措いて、何物かを大なりと思ふ者は、微々として下に匍ふこと久しかるべし。而して凡そ神にあらざるものは、皆無にして無となすべきなり。

まことに心照らされたる敬虔なる人の智慧と、博學にして勤勉なる學者の智識との間には、大なる相異あり。上より出で、神の勢力より滴り落つる智識は、人の才智により勞して積まれたるものよりは、遙かに貴し。

瞑想をねがふ者おほしと雖も、これがために必要なることを實行せんと努めざるなり。人表象と外部の物とに安んじて、全く己れを殺すことを忽諸にすること、是また大なる障害なり。

靈に屬する者と稱せらるゝ我等が、過ぎゆくところの卑しき物を獲んがために、斯くも甚だしく苦しみ、斯くまでに心勞しながら、衷なる生命に就て考へんとて殆んど嘗て全心をこめたることなきは、如何にしてぞや、斯く我等を誘ひ、我等を僣越ならしむるは何ぞや、われは知らざるなり。あゝ我等は想ひ起こすこと暫らくにして、後直ちに戸の外に馳せゆき、綿密なる反省によりて、我等の業を量ることをせざるなり。われらは己が情愛の何處に存するかを心にとめず、また、凡て我等の行爲の不純なるを嘆かざるなり。そはすべての肉その道のみだしたれば、大なる洪水來たりしなり。かくて我等の衷の情愛甚だしく汚されたるがゆゑに、行爲も必ず、衷の勇氣を缺ける印として、また汚されざるを得ざるなり。

きよき心より善き生命の果いつるなり。われらは人幾干の業を爲せしやと訊ぬれども、如何なる徳をもつて其業の行されしやを、深く考ふることなし。われ汝は其人の勇ましきか、富めるか、



美しきか、賢きか、書を善くするか、歌にたくみなるか、善く働くか否やを訊ぬれども、かれが如何ばかり心まづしく、如何ばかり敬虔にして、靈につける者なるかを聞くこと稀なり。

生まれながらの心は、人の外部の事を重んじ、恩寵は内部にむかふ。前者は失望すること屢なり、後者は神に依りたのむが故に、欺かるゝことなし。

### 第三十二章 己れを棄て凡ての邪慾を棄つべきこと

子よ、全く己れを棄つるに非ざれば、なんぢは完き自由を有つこと能はず。すべての所有主と己れを愛する者、凡て貪婪なる者、穿鑿を好む者、快樂を興ふるものを常に求めて、耶蘇基督のことを求めず、而して永續せざる建物を屢計劃して組みたつる饒舌家は、鎖に繋がれざるなり。そは神より出でざるものは凡て亡ぶべければなり。この短くして意味ふかき言を堅く守れ、曰く「凡てのものを棄つべし、さらば汝は凡てのものを得ん、」なんぢの慾を棄つべし、さらば汝は安息を獲ん」と。なんぢの心に此を泣く鑿みよ、而して此を成し遂けたる時は、すべての事を悟

るべし。

主よ、これは一日の業にあらず、また小兒の遊戲にもあらざるなり。然り、此うちに信仰の完全の道は悉く概括せらるゝなり。

子よ、なんぢ完全の道の如何なるものなるかを聞きて、これを避け、または忽ち落膽することなく、却つて更に高きものを得んとて奮ひ立つべし、少くとも此を得んとの願ひを以つて慕ひあへぐべし。なんぢの斯くあらんことを願ふ。また汝がもはや己れを愛する者たらずして、我が命令と、また汝のうへに父として我が定めたりし者の命令とに忠實に従ふ者たらんことを願ふ。さらば汝はいたく我が心になふものとなり、汝の生涯は歡喜と平安とのうちに過ぎん。なんぢの棄つべきもの尙ほ多し、此等のものを全くわれに委ぬるにあらざれば、汝はなんぢの求むるものを獲ざるべし。

われ汝にすゝむ、なんぢ富める者とならんがために、我より火にて煉りたる金を買へ。これ即



ち、天の智慧にして、凡て卑しきものを足の下に蹂躪するものなり。これを地上の智慧のうへに凡て人間と己れとの満足のうへに置くべし。

人々の間に貴く、また高しとせらるゝものゝ代りに、賤しきものを汝自らのために買ふべしと、我は云へり。眞の天の智慧は、人々の間に極めて賤しく且つ小さく見え、殆んど無視せらるゝなり、これ自ら高き思ひを抱かず、また地上に於いて大なるものとせられん事を求めざるによる。多くの者は唇にて此を讃むれども、生活に於ては此に遠ざかれり、されど此は多くの者に蔽される價たかき眞珠なり。

### 第三十三章 心の輕浮なること、また窮極の

#### 志を神に向はしむべきこと

子よ、今なんぢの抱ける感情に信賴することなかれ、それは忽ち變はるべければなり。生くるあ

ひだは、たとへ己が意に反してなりとも、なんぢは變るべきものなり、かくて汝は或る時は快活にして、或る時は悲しみ、或る時は平安にして、或る時は惱まされ、或る時は敬虔にして、或る時は不虔となり、或る時は勤勉にして、或る時は懶惰となり、或る時は嚴肅にして、或る時は輕薄となるなり。

されど賢くして良く靈の訓練を受けたる者は此等の變はるべきものを超えて立ち、己れ自らのうちに何を感じるか、また定まるところなき風のいづれに吹くかをも顧みずして、たゞその心の注意は全く正しく且つ願はまほしき目的にむかひて進むなり。

そは彼は斯くして凡ての境遇の變遷のあひだにありて、絶えず己が志の純なる眼を我にむけて變はることなく搖ぐことなかるべければなり。而して志の眼いよく純なれば、人はますます堅く、吹き變はる疾風を貫きて、進みゆくなり。

されど人おほくは純なる志の眼を眩くせり、そは眼はその遇ふところの快きものに忽ち惹きつ



けらるべければなり。而して利己の黒徳クノトクの全き無きものは稀なり。即ちユダヤ人がベタニヤのマルタとマリヤとのもとに來たりしは、イエスの爲のみならず、またラザロを見んとてなりき。

この故に我等の志の眼を、純にして正しからしめんがために、潔めざるべからず、またすべて中間に來たる様々のものを超えて我に向かはしめざるべからず。

### 第三十四章 神は神を愛する者にとりては凡て

の物に超え凡ての物に於てたのし

わが神を見よ。わが一切を見よ。

われ又なにをか欲し、また何ものをか望むを得んや。

あゝ、「言」を愛して、世をも世にあるものをも愛せざる者にとりて、いかに慕はしく香ぐはしき言なるかな。

わが神、わが一切よ。

悟る者にとりてはこの言にて足れり。而して此をしばく反覆することは、愛する者にとりて樂しきことなり。そは汝いまさば、凡てのもの樂し、されど汝いまさば物みな懶うだるうければなり。なんぢは心の靜謐と大なる平安と樂しき歡喜とを與へたまふ。なんぢは我等をして凡てのものを善く思はしめ、凡ての事に於て汝を讚美せしめたまふ。また汝を離れては何もいも長く樂しみをあたへず。物にして樂しく且つ喜ばしからんとせば、なんぢの恩寵加はり、なんぢの智慧の味をもつて味つけざるべからず。汝を樂しとせば、凡てのもの樂しく、汝を樂しとせずば、何ものか能く樂しからんや。

されど世の智者、また肉を樂しとする者は、汝の樂しき智慧に乏し。そは世にあるは全然の虚



妄にして、肉には死あればなり。されど世のものを軽んじ、肉を殺して、汝にしたがふ者は、眞に慧しとして知らる。そは彼は虚妄より眞理へ、肉より靈へ移されたればなり。斯かる人々にとりては神は樂し、而して造られたる物に於て如何なる善きものを見出すとも、すべて此をその造主を讚美する題材となすなり。

されど造主の慕しさと造られたる物の樂しさと、永遠の慕はしさと時間の樂しさと、造られざる光の慕はしさと、點ぜられたる光の樂しさととの相違は大なり、然し甚だ大なり。

あゝ一切の造られたる發光體にまさる永遠の光よ、願くは汝の輝きの光線を上より射て、すべて我が心の隅々を照らしたまへ。我が心の凡ての力を潔め、祝福し、美はしからしめ、また活かし、かくて我をして歡喜に恍惚となりて汝に縋らしめたまへ。

あゝ、汝われと共にいまして我を充ち足らはしめ、我にとりて萬の物に於て萬の事となり給ふべき、其さいはひなる望ましき時の來たらんことを。この時の與へられざる限り、わが喜びは充

たされざるべし。あゝ、されど尙ほ舊き人は我がうちに生きて、全くは十字架につけられず、また全くは死せず、尙も強く御靈にさからひ、内心の戦ひを起して、靈魂の王國に平安をゆるさるなり。

されど汝海の力を治め、その浪の揺らぐを鎮めたまふ者よ、起ちて我をたすけ給へ。戦ひを好むもろくの民を散らしたまへ。なんぢ彼等を汝の力をもつて鎮定したまへ。われは汝に希ふ、なんぢの大なる御業をあらはして、汝の右手を崇めさせたまへ。そは、あゝ主なる我が神よ、なんぢの外に我が希望なく避所もなければなり。

### 第三十五章 此世に於ては誘惑を避くべき處

あることなし



子よ、なんぢは此世に於て決して安全なることなく、活くるかぎり、常に靈の鎧を要すべし。

なんぢは敵のうちに住みて右手よりも左手よりも攻めらる。この故になんぢ若し忍耐の楯をもつて四方に自らを防がざれば、長く傷なきを得ざるべし。然かのみならず、汝もし我がために凡てのことを忍ばんとの眞摯なる願ひをもて、なんぢの心を我に留むるにあらずば、激烈なる戦闘に堪ふることも、また祝福ゆがまれたる者の勝利に達することも能はざるべし。この故に汝は雄々しく凡てのことを通過し、汝にさからふ凡てのものに對して強き手を用るべからず。そは勝を得る者にはマナナ與へられ、而して怠たる者には多くの不幸残ればなり。

## 二

なんぢ若し此世に於て安息を求むとせば、いかで永遠の安息に達すべけんや。自ら多くの安息に心を置かずして、大なる忍耐を思ふべし。眞の平安を地上にあらずして天に求めよ、人にあらず、また他の造られたる物にあらずして、たゞ神にのみ求めよ。神を愛するため、汝は進んで凡ての事に遇ふべきなり、即ち勞苦と苦痛、誘惑、苦惱、心勞、窮乏、疾病、傷害、誹謗、非難、屈辱、汚辱、譴責および罵詈を受くべきなり。

此等は徳をたつる助けとなり、此等は基督の若き兵卒を試み、此等は天の冠を組みたつるものなり。われは束の間の勞苦に對して永遠の報いをあたへ、一時の恥辱のために永久の榮光を與へん。

## 三

なんぢは汝の意のままに常に靈の慰藉を得べしと思ふや。わが聖徒は常にこれを得たりしに非ず、却つて多くの苦難と様々の誘惑と大なる悲痛とに遇ひたりき。されども彼等は凡てのことを



忍びて耐へ、而して今の時の苦難は未來の榮光にくらぶるに足らざるを知るがゆゑに、己れを恃まずして神をたのみたりき。多くの人が多くの涙と大なる苦勞との後に辛うじて得たるものを、汝はいま得んとおもふや。

主を待ちのぞみ、丈夫のごとく自らふるまひて、強かれ。疑ふことなく、脱走することなく、神の榮光のために大膽に身も魂も賭すべし。われは豊かに汝に報いん、われは凡ての患難に於てなんぢと共にあるべし。

### 第三十六章 人の虚しき審判を恐るべからず

子よ、なんぢの心を堅く主に置くべし。而してなんぢの良心なんぢの忠實にして潔白なることを宣告する時は、人の審判を恐るゝ勿れ。斯く苦しむことは有益にして福ひなり、また己れよりも神を恃みとする謙慮へんりょれる心にとりては惱ましきことに非ざるべし。

多くの人は多くのことを語る、故にその云ふところ信じ難し。加ふるに、萬人を満足せしむることは、爲し難きことなり。パウロは主にありて凡ての人の心に適ふやうに努め、また凡ての人には凡ての人の狀に従ひしかど、彼にとりては、人の光によりて審かるゝことは最も小さきことなりき。彼は力を盡して能ふかぎり、人の徳を建て人の救ひのために働けり。しかも彼は時として他人に審かれ、また侮られ、これを避くること能はざりき。この故に彼は萬事を知りたまふ神に萬事を委ねたり、而して不義を云ひ、虚しきこと、偽りを思ひ、はしこま縦に物云ふ人々の口に對しては、忍耐と謙慮とをもつて自らを護れり。

されども時として彼は答へをなせり、これ弱き者の彼の沈黙によりて躓かんことを恐れしがゆるなり。

汝いかなる者なれば、今日ありて明日は見ることなき死ぬべき人を恐るゝや。神を畏れよ、さらば汝は人の威嚇をおそれざるべし。何人も言または行によりて汝をいかで害し得んや。彼はなんぢを害するよりも却つて自らを傷つくるなり、また彼は何人たるとも神の審判を遁ること能



はざるべし。

なんぢ神をなんぢの眼前に置き、而して氣短き言と争ふことなかれ。また今なんぢ負け、而して受くべからざる恥辱をかうむると見ゆとも、是が爲に恨むこと勿れ、また短氣のために汝の冠を汚すこと勿れ。寧ろ天にある我に汝の眼を擧ぐべし、我は凡ての恥辱と害とより汝を救ひ、おのくの所作にしたがひて報い得るなり。

### 第三十七章 心の自由を獲んために完く自己

#### を斥くべきこと

子よ、汝自らを棄つべし、さらば我を見出さん。如何なるものをも自ら擇ばず、何ものをも己がものと稱へずして、汝のある處に立て、さらば汝は常に獲るところあらん。そは汝もし再び己れを採ることなくば、己れを棄つるその時、更に大なる恩寵なんぢに加へらるべければなり。

主よ、われは幾度おのれを棄つべきか、また如何なる事に於て己れを棄つべきか。

常に、然り時毎に、小事にも大事にも然すべし。われは何物をも除かず、汝が一切のものより離脱せんことを望むなり。然らずして、なんぢ内にも外にも凡ての私意を脱せざれば、いかで汝わがものとなり我れまた汝のものたるを得ん。なんぢ此を做すこと速かなれば、いよく汝に善かるべし、また汝これを做すこといよく十分にして眞摯なれば、汝はます／＼我を喜ばし、汝の利得も更に大なるべし。

おのれを棄つるも例外を設くる人あり、これ神に全き信頼を置かず、従つて自らのため如何に備ふべきかを思ひめぐらすが故なり。また始めは凡てを献ぐるも、後誘惑が扉を叩く時、再び舊習に復し、かくて徳に於て進歩をなさざる者あり。此等の人もし始めに全く己れを棄て、日毎に自らを捧ぐるにあらざれば、純なる心の眞の自由にも、また我が樂しき親密の恩寵にも達することなかるべし。これなくば永遠にして實をむすぶ結合あらず、またあること能はざるなり。



われ既にしばく、汝に云ひ、今また汝に云ふ。汝自らを棄て、汝自らを斥くべし、さらば汝は多くの内心の平安を享けん。すべてのものを悉く献け、例外を置かず、報いを望まず、ひたすら躊躇ふことなく我がうちに住むべし。さらば汝は心に自由を獲て、暗きも汝を蹂躪せざるべし。これを汝の目的となし、これを汝の祈禱となし、これを汝の願望とすべし、これ汝が凡て汝のものを脱し、裸かなるイエスに裸にて従ひ、己れに死して永遠に我に生き得んがためなり。その時すべて虚しき妄想と、正しからぬ心勞と、無用の配慮とは、跡を斷つべし。その時、過ぎたる恐怖も亦去り、濫りなる愛も死すべし。

### 第三十八章 外部の事に於て善く自制し、危

難の時に神に頼るべきこと

子よ、すべての處と外部の行爲または職務に於て、汝の内心自由にして能く自らを主宰し、萬物を汝の下にあらしめて、汝を萬物の下にあらしめざるやう、熱心に努むべし。なんぢは汝の行爲の主にして支配者たるべし、奴隸または傭人たること勿れ。寧ろ神の子の嗣業と自由とに過ぎ行きし自由の人なる眞のヒブル人たれ。彼等は現世のものゝ上に立ちて永遠のものを冥想し、左の眼をもつて過ぎ行くものを眺め、右の眼をもつて天のものを見るなり。彼等は此世のものに誘はれて此に縋がることなく、却つて此世のものをして己が用に供し、神によりて定められ、大なる工匠によりて指し示めされたる道に能くかなはしむるなり。彼等は神の創造のうちにあるものを一として秩序なきものとして置かざるなり。



なんぢ若しまた凡ての境遇にありて立つに外觀によらず、また見るところ聞るところのものを量るに肉の眼を以つてせず、凡ての事に於てモオセのごとく直ちに幕屋に入りて主の訓誡を乞はば、時として汝は神の聖言を聴き、現在と未來との多くの事に就き教へられて歸らん。そはモオセは疑問を解かんがために常に幕屋に赴き、危難と人の不義とに惱まざるゝ時、支へられんがため、馳せて祈禱の助けを受けたりき。斯くのごとく汝もなんぢの心を密室に避處を採り、熱心に神の辯護を希ふべし。そはヨシユアとイスラエルの子等とが、豫め主の口より訓誡を求めずして軽々しくギベオンの人々の好言を信じ、偽りの憐憫によりて惑はされたるがために、彼等に欺かれたるを我等讀めばなり。

### 第十三九章 人は業務に於て焦慮すべからず

#### 一

子よ。常になんぢの業を我に委ねよ。時いたらば我は良くこれを處理すべし。我がこれを整ふるを待て、さらばその汝のために益あるを見ん。

主よ、われはいと快く一切を汝に委ねまつる。そは我が心勞は殆んど無益なればなり。願くはわれ斯く多く未來のことを慮らずして、躊躇することなく、己れを汝の聖旨に委ねまつらんことを。

#### 二

子よ、人は往々その願ふところのことに熱心に計畫すれども、これに達する時、心を變へ始むることあり。これ情愛は久しく一つのものゝ周圍に翔るものにあらずして、此より彼へと我等を追ひやるを以つてなり。この故にいと小さきことに於てすら己れを棄つるは、人にとりて小さからぬ利益なり。人の眞の成長は克己にあり。而して斯く己に克ちたる者は、甚だ自由に於て安らかなり。されど凡ての善に敵對する古き仇は絶えず誘惑を止めず、いかにかけて心せざる者を欺瞞の係蹄に陥れんとて、日夜死の罫を置くなり。



なんぢら誘惑に陥らぬやう、眼をさまし、かつ祈れと、主云ひ給ふ。

#### 第四十章 人には自ら一の善事なく、また誇

るべきものなきこと

—

主よ、人はいかなるものなれば、これを聖意にとめたまふや、人の子はいかなるものなればこれを願みたまふや。人に何の功ありて、なんぢこれに汝の愛顧を垂れたまふや。

主よ、なんぢ若し我れを棄てたまふとも、われいかで此を恨むを得ん。またなんぢ我が願ふところのことを爲し給はずとも、われいかで良く異議を申し立つるを得ん。まことに我等の正しく

思ひ且つ云ひ得るはこれなり、曰く「主よ、われは無にして、われは何事をも做すこと能はず。われには自ら一つの善きものなく、凡てのことに於て足らざるなり、また無にむかひて道を辿りつゝあるなり。されば汝われを助けて、内心を訓練し給ふにあらすば、われは全く冷かになりて弛むべし」と。

されど主よ、なんぢは常に變はることなく、永遠にながらへて、善、義、聖にましませり。而して凡て汝の爲し給ふところは善、義、聖にして、また智慧をもつて定め給へり。されど進むよりも退き易き我れは、一の状態にながらふことをせざるなり、そは七つの時われらの上を過ぎゆけばなり。

されども汝の聖意にかなひて汝もし助けの御手を伸ばし給はゞ、忽ち善きにかはるなり。そは汝は人の助けを用ひずして獨り我を助け、かくて我を強むるを得たまへばなり。これ我が顔色もはや變はらず、我が心たゞ汝にのみむかひて安んじ得んがためなり。



この故に、敬虔に達せんがために、或は死すべき人われを慰め得ざるが故に當然われをして汝を求めしむる必要のために、われ能く一切の人の慰藉を放擲することを得ば、われは宜しく汝の恩寵を望み、また新しき慰藉を受けて歡呼するを得ん。

二

なんぢに感謝す、いづれの時を問はず、われに福ひなるものは、すべて汝より出づるなり。

されど我れは汝の眼には空しくして無なり、定かならざる弱き人なり。されば我れは何をもつてか誇るを得ん、また何のために尊ばれんことを欲せん。無なるがためなりや。これはまた最も空しきことなり。まことに虚しき誇りは悪疫にして、虚妄の最も悪しきものなり、そは人を眞の榮光より離れしめて、天の恩寵を人より奪へばなり。即ち人は自らを喜ばす時に汝を怒らし、人々の稱讃を喘ぎもとむる時に眞の徳を奪はるゝなり。されど人の眞の誇りと聖き歡喜とは、汝によりて誇り、己れに於て誇らず、汝の聖名に於て喜び、己が力に於て喜ばず、また汝のためにあ

らずば如何なる物をも悦ばざるにあり。

わが名にあらずして汝の聖名はたゞへらるべし。わが業にあらずして汝の聖業は尊ばるべし。なんぢの聖き名はほめらるべし、されど我には少くも人々の稱讃の與へられざらんことを祈る。なんぢは我が誇りなり、汝はわが心の歡喜なり。なんぢによりて我はひねもす誇りて歡ばん。されど我がためには、われは我が弱きことのほか誇るまじ。ユダヤ人等をして互ひに譽を求めしめよ、たゞ神より來たる譽を求むることを我が願ひたらしめよ。そは凡て人間の誇りも、凡て此世の譽れも、すべて世の尊貴も、なんぢの永遠の榮光にくらべては、虚しくして愚かなればなり。あゝ我が眞理にして、我が慈悲、わが神なる尊き三位一體よ、願くは讚美と譽れと力と榮光とは永久に獨り汝にあらんことを。

第四十一章 凡て此世の譽れを輕んずべきこと



子よ、なんぢ若し他人の尊ばれ昇進し、己れの侮られ賤しめらるゝを見るときも、心にかくること勿れ。なんぢの心を天にある我に擧ぐべし、さらば地上の人々の侮りは汝を悲しましめざらん。

主よ、われらは盲目にして、虚妄のために誤られ易し。われ若し公平に自らを見れば、いかなる物も我に害を加へたることなく、従つて我れは汝の前に正常に啞くこと能はざるなり。されど我はしばしば甚だしく汝にむかひて罪を犯したるがゆゑに、凡て造られたるもの、我に逆らひて武器を採るは當然なり。

この故に我は正に恥辱と侮蔑とを受くべきものなり。されど讚美と譽れと榮光とは汝に歸すべきものなり。而してわれ凡ての造られたる物に侮られ棄てられて全く無きものと見ゆるやう、欣びいさみて自らを訓練するにあらざれば、われは内心の平安と安固とを獲ること能はざるべく、また靈を照らさるゝことも、汝に十分結ばるゝことも得ざるなり。

#### 第四十二章 我等の平安は人に據らざること

子よ。なんぢ若し感情または親しき交際によりて何人かに汝の平安を置くに至らば、汝は不安にして捉はるゝ者とならん。されど汝もし永久に常住なる真理に心をとめなば、友の離別または死も汝を憂ひしめざるべし。なんぢの友に對する愛もその基礎を、我に置くべし、而して凡そ汝に善しと見え、またこの世に於ていと慕はしきものは、なんぢこれを我がために愛すべし。われを離れては友情も力なく永續することなく、また我によりて結ばれざる愛は眞ならず純ならざるなり。愛する者に對する斯くの如き情愛に向かひては、なんぢ斯く死するものとなり、爲し得るかぎり、凡ての人間の交際を離るゝことを擇ぶべし。

人神にいよく接近するに従ひ、ますます凡て地上の慰安を離るゝなり。またいよく低く己れに沈み、己が眼に自ら卑しくならば、ますます高く神にのほるなり。されど如何なる善にても己に歸する者は、神の恩寵の己れに來たるを妨ぐるなり。そは聖靈の恩寵は常に謙虚へんくたれる心を求



むればなり。

なんぢ若し全く己れを空しくし、また凡て造られたるもの、愛を己れより無くするを得ば、われは汝に大なる恩寵を溢れしめん。なんぢ造られたるものを見る時は、造主の眼は汝より離る、なり。

なんぢの造主のために、凡ての事に於て己に克つことを學ぶべし、さらば汝は神の智識に達することを得ん。いかに些かなりとも、もし濫りにこれを愛し慕へば、汝の靈魂を阻みて、至高善に至るを妨げ、靈魂を墮落せしむ。

#### 第四十三章 虚しき世俗の智識を避くべしこと

子よ。人々の美はしき巧みなる言をして汝を魅せしむるなかれ。そは神の國は言にあらず、能力にあればなり。心を燃やし思ひを照らし、悔悛を齎らし、またさまざまの慰藉をあたふる我が

言を聴くべし。

學問を増し尙も賢く見られんがために、我が言をなんぢ決して讀むことなかれ。なんぢの罪惡を滅ぼすことを努めよ。そは此事はおほくの困難なる問題を知るよりも、汝を益すること多かるべければなり。なんぢ多くのことを讀みて學びたる時には、常に一つの本源に歸らざるべからず。われは人に智識を教ふる者なり。また我は人の教へ得るところに優りて明らかなる智解を幼兒にあたふ。我に聞くところの者は忽ち賢くなり、靈に於て多く益すべし。

人の多くの奇しき事を訊ねて、汝に仕ふる道に就き心を用ふること少き者は禍ひなるかな。師の師、天使の主なる基督あらはれて、凡てのもの、課業を聞き、即ちおのくの良心を檢べたまふ時來たらん。而して其時彼は燈をもつてエルサレムを尋ね、暗きにある隠れたる事は明らかにせられ、舌の論理は黙せしめらるべし。

われは謙虚れる心を瞬きの間に高めて、人の學校にて十年の間まなびしにも優りて、永遠の眞理の道理を悟らしむる者なり。われは言の音なく、説の混雜なく、競争の誇りなく、論理の劍術



なしに教ふ。われは地上のものを軽んじ、眼前のものを厭はしめて、永遠のものを求め、永遠のものを知り、名譽を避け、害をしのび、一切の希望を我に置き、我を描いては何ものをも願はず、凡てのものを超えて熱烈に我を愛するやうに、人々を教ふるものなり。

即ちひとりの者ありき、彼われをそのいや衷なる靈魂のうちに愛することによりて、神の眞理をまなび、不思議なることを語れり。彼は繁瑣なる事柄を究むるよりも、凡てのものを棄つることによりて大なる進歩をなせり。

されどわれは或る者には平凡なる眞理を語り、或る者には特別の奥義を語り、或る者には徴候と形象とに於いて穩かに我自らを示し、而して或る者には多くの光をもつて神祕を啓示す。書の聲は一なりと雖も、教ふところは凡て同じからざるなり。そは我は内心に於ける眞理の教師、心を探ぐる者、思ひを識別する者、行ひを促す者にして、我が宜しとおもふまゝに、おのゝくに分け與ふればなり。

#### 第四十四章 外部のものに心を留めざることに

一

子よ。なんぢは多くの事に於いて無知となり、己れを地上に死せる者となし、全世界は己れに對して十字架につけられたりとせよ。なんぢは亦、驛となりて、多くの事を過ぎ行かしめ、而して汝の平安にかゝる事に就いていよく思ふべし。

樂しからざるものより其眼をめぐらし、各の人を各の意見に委ぬるは、争論の奴隸となるよりも善し。なんぢ若し神と和ぎ、神の審判を仰がば、負くることを忍ぶは容易ならん。

二



あゝ主よ、われらは如何なる道に來たりしぞや。見よ、人々は一時の損失を哭き、些かなる利得のために勞し奔走するなり、されど靈の損失を忘れて、殆んど遂に人々は家に歸り來らざるなり。益するところ有るか無きかの如きものを究めながら、特に缺くべからざるものを軽々しく看のがすなり。これ人全く外物に陥り、速かに悔悟するにあらざれば、その中に輾轉して満足するによる。

#### 第四十五章 凡ての人に信任を置くべからず

また人は言にて過ち易きこと

一

主よ、願くは患難のときに助けを我にあたへたまへ、人のたすけは空しければなり。

必ず忠信なるべしと自ら思ひしところに、是を得ざりしこと如何に繁かりしぞや。また少しも豫期せざりしところに、是を得たりしこと如何に繁かりしぞや。この故に人に希望を置くは徒らにして、あゝ神よ、義しき者の救ひは汝にあるなり。

あゝ主わが神よ、われらに關る凡てのことに於いて汝をたへん。

われらは弱くして定りなく、速かに欺かれ、また全く變はるなり。凡ての事に於て自らを守ること細心周到にして、決して如何なる欺瞞にも惑亂にも陥らざる者は誰ぞや。されど、あゝ主よなんぢに依り頼み、一心に汝を求むる者は、斯く容易くは倒れざるなり。また彼もし患難に陥りて、未だ嘗て遇はざりしほどの甚だしき惑亂にあふとも、速かに汝によりて救はれ、或は汝によりて慰められん。そは汝は終りに至るまで汝を望む者を棄てたまはざればなり。

友の凡ゆる患難を通じて堅く志を變へざる忠信なる友は稀なり。汝あゝ主よ、なんぢのみ常に全く信實にましませり、而して汝にひとしきもの他にあることなし。



「わが心は堅く定かにして基督を基とせり」と云ひし聖き靈魂は、あゝ如何に賢かりしぞや。われ若し斯くの如くならば、人の恐怖も斯く容易くは我を窘しめず、言の投鎗も我を愕かさざるべし。

誰か未來を豫知することを得ん、誰か未來の禍ひを防ぐことを得ん。もし豫知せることすら我等を害すること往々なりとせば、豫知せざることの我等を傷くべきこと如何に残酷なるべきぞや。されど私の如きあさましき者にして、何故に尙ほ善く我が未來を判ぜざりしや、何故にまた斯く輕々しく他人を信任したりしや。されど我等は人なり、たとひ多くの者に天使と思はれ天使と稱せらるゝとも、脆き人にほかならず。主よ、われは汝を措きて誰に信頼せんや。なんぢは決して欺かず又あざむかるゝことなき真理にましますせり。然るに此に反して凡ての人はいつはりなり、弱く、定りなくして、殊に言に於て躓き易し。されば我等は面する時正しく聞ゆと見ゆるものに

さへも、先づ直ちには信を置くべきにあらざるなり。

即ち汝は賢明にも、人々に心せよと我等を戒め、而して人の仇は、その家の者なるべしとも、また視よ此處にあり、或は彼處にありと云ふ者ありとも信するなかれと戒めたまへり。わが受けし害は我が教師なりき、願くは此者われに謹慎を教へて愚を教へざらんことを。人ありて云ふ、心せよ心して我がなんぢに云ふところを漏すなかれと。然るに我れ沈黙してその事を秘しをれりと思へるに、我に秘めよと願ひしその事を彼自ら秘しをること能はずして、直ちに我と自らとを裏切りて去るなり。あゝ主よ、願くは斯くのごとき虚しき言と邪しまなる人々より我を救ひ出だして、彼等の手に陥らしめず、また斯くの如きことを決して行はしめたまふ勿れ。願くは眞にして信頼すべき言を我が口に入れ、たくらみある舌をわれより遠ざけたまへ。他人より受くるを欲せざることは、われ力をつくして此を爲すを避くべきなり。



あゝ他人のことに就て沈黙し、凡ての風評を軽々しく信ぜず、心なく噂をつたへず、殆んど人に己が心を披瀝せずして、心をはかりたまふ汝をつねに求め、さきくの言の風に吹きまはさずして、内外のことの皆なんぢの聖旨に従ひて成就せんことを願ふは、如何に善くして又平安の實を結ぶぞや。

人に見らるゝことを避け、また外部の賞讃を齎すがごときことを求めずして、ひたすら力をつくして生命と熱誠とを増さしむるものを追ひ求むるは、天の恩寵を保つために如何に安全なるぞや。その徳を人に知られ、稱賛さるゝこと迅きに過ぎしがために、害せられたる者いかに多きぞや。我等に致へられたる如く、全く試練と戦闘となる此もろき世に於ては、沈黙によりて恩寵の利益の保持せられたること如何に豊かなりしぞや。

#### 第四十六章 言語の投槍われらを襲ふ時は我等

等の信賴を神に置くべきこと

子よ。堅く立ちて我に頼りたのむべし。

そは言は何ぞや、たゞ言に過ぎざるのみ。言は空中を飛べども、一の石を害することなし。なんぢ若し罪あらば、喜んで自ら改むべしと思へ。されど汝の良心なんぢを責めずば、神のために喜んで此を忍ばんと思ふべし。なんぢ未だ激しき鞭撻に耐ふる勇氣なきを思は、少くとも時ありて言のために苦むとも、これ全く些かなる事なり。然るに何故に斯かる些事をして汝の心を痛ましむるや、これ汝なほ肉に屬し、分に超えて人を重んずるが故にあらずや。そは汝は侮らるゝことを恐るゝがゆゑに、なんぢの過の責めらるゝを好まずして、辯疏の隱家を求むればなり。

されど更に良く自らを省みよ、さらば汝は世の尙ほ汝のうちに生き、また人を悦ばさんとする虚しき慾望の存するを認めん。そは己が過のために貶され惱まざるゝことを厭ふは、これ汝が眞に謙虚ならず、また世に對して眞に死せず、世に對して十字架につけざりしこと明らかなればなり。されど汝わが言に耳を傾くべし、さらば汝は人の一萬の言をも心にとめざるべし。見よ、そ最も甚だしき惡意より思ひつき得る誹謗なんぢにかへらるゝとも、汝もしこれを全く過ぎ去ら



しめ、塵に過ぎざるものと見做さば、如何で汝を害せんや。なんぢの頭より一すぢの髪の毛だに抜き得んや。<sup>1</sup>

されど内に心なく、眼前に神なき者は、誹謗の一語に惱まされ易し。されば我に信頼して、己が判断を恃まんとせざる者は、人を恐るゝことなかるべし。そは我は一切の祕密の審判者にして識別する者なればなり。<sup>2</sup> われは事の如何に行はれしかを知れり。われは害を加ふる者の誰にして又害を受くる者の誰なるかを知れり。かの言は我より出でたり。わが許諾によりて此事おこれりこれ多くの人の心の念ひあらはれんためなり。<sup>3</sup> われは罪ある者をも罪なき者をも審判せん、されど祕かなる審判によりて豫め彼等双方を確むるを宜しと思へり。

人の證言は往々あやまれども、我が審判は眞にして、變らず、また覆されざるべし。即ち我が審判はおほむね祕れて僅かなる者のほか知る者なく、たとひ愚かなる者の眼には正しく見えずとも決して誤らず、また誤ること能はざるなり。この故に人は凡ての審判に於て我に訴ふべし、己が意見に據るべきにあらざるなり。そは神より如何なること來たるとも、亂さるゝことなければ

なり。たとひ無實の罪を着せらるゝとも、彼は深く心にかげざるべし。而して又たとひ他人より正當の辯護を受くるとも、虚しく高ぶることなかるべし。そはわれ人の心と腎ひらととを究むる者にして、顔と人の容貌とによりて審判せざる者なることを、われ憶えをればなり。即ち人の判断にては賞讃すべしと思はるゝものにして、往々我が眼には責むべきものとなるなり。

あゝ汝つよくして忍びたまふ正しき審判者にまします主なる神よ、人間の脆きことゝ邪なることゝを知りたまふ汝よ、願くはなんぢ我が力また我が唯一の據となりたまへ。そは我が良心われを満足せしめざればなり。なんぢは我が知らざる事を知りたまへり、この故に我は凡ての誹りを受くるとも、自らへりくだり、柔順にこれに耐ふべきなり。されば我が行ひ此に反する時には、常に汝の憐憫によりて我を宥し、更にふたゝび尙も大いなる耐ぶ心を我に與へたまへ。そは我が潜める疑懼を辯疏するために、己が空しき正義に恃むよりは、赦罪を獲る方確實なる道なればなり。われ自ら責むべきところあるを覚えざれども、此によりて義とせらるゝこと無し。<sup>3</sup> そは汝の憐憫によらずば活ける者一人だにみまへに義とせらるゝことなければなり。



## 第四十七章 凡ての難事は永遠の生命を得ん

ために忍ぶべきこと

一

子よ。なんぢ我がために執りし勞苦のために疲勞すること勿れ。また患難をして決して汝をうなだれしむることなく、我が約束をして凡ての境遇に於て汝を強め慰めしめよ。

われは凡ての度を量とを超えて、良く汝に酬ゆるを得るなり。

なんぢの此處に苦しむは久しからず、また憂ひのために常に抑へらるゝに非ざるなり。暫く待て、さらば汝はなんぢの禍ひの速かに終るを見ん。すべての苦役と擾亂との熄む時きたらん。時

と共に過ぎ去るものは凡て憫れにして儚なし。

なんぢの爲すべきことを爲し、忠實に我が葡萄園に働け、われは汝の報酬たらん。書き、讀み誦<sup>うた</sup>ひ、哭き、黙し、祈り、丈夫のごとく諸の十字架に耐ふべし、永遠の生命は凡て此等の戦ひ、否更に大なる戦ひに償ひするものなり。

主の知りたまふ日來たらん、その時平安あるべし、是は此今の時のごとくに晝にもあらず夜にもあらずして、消ゆることなき光、無限の輝き、堅き平安、および定かなる休息なるべし。その時なんぢは、この死の體より我を救はんものは誰ぞ、やと云ふことなく、また禍ひなるかな宿りは長しと叫ばざるべし。そは死は逆倒に投げられ、而して破るゝことなき救ひありて、心勞なく、福ひなる歡喜と、楽しく貴き懇親あるべければなり。

二

あゝ汝もし天にある聖徒の永遠の冠を見、また嘗ては此世に賤しむべき者とせられ、或る點 於



ては生くるに足らずとさへ思はれし彼等の今いかばかりの榮光をもて歡べるかを見たらんには、まことに汝は直ちに自らを卑くして地にさへも跪き、ひとりの人の上に立たんよりは寧ろ萬人の下にあらん事を求むるなるべし。また汝はこの世の樂しき日を食らんよりは、却つて神のために患難に遇はんことを歡び、人々のあひだに無きものとして目ざし、るゝを汝の最大の利得と爲さん。

あゝもし此等のこと汝に樂しく、而して汝のこゝろの底に沈みられたらんには、いかで一回の怨訴をだに敢て爲すことを得んや。すべての苦役は永遠の生命のために忍ぶべきにあらずや。

神の國を獲ると失ふとは小事にあらざるなり。この故になんぢの顔を天にむけて、我れ及び我と共にある凡ての我が聖徒を見よ。彼等はこの世に於て激しき戦ひを戦ひしが、今は歡び、今は慰められ、今は安らかに、今は安息にあり。而して彼等は我が父の國に於てとこしへに我と共にとゞまらん。

#### 第四十八章 永遠の日と此世の艱難とに就て

あゝ、いとも福ひなるかな、上なる都にある家よ、あゝ、永遠の雲なき日よ、夜これを味くすることなく、その没することなき日は最高の眞理なり。この日は常に歡ばしく常に安らかなり。而して決して變はりて反對のものとなることなし。あゝ願くは其日の明けて、時にかゝる凡て此等のことの終はりたらんことを。

まことに聖徒に對しては、この日は消ゆることなき輝きもて照り榮ゆるも、地に寓れる者に對しては只遠くより鏡をもて見るがごとし。天の市民はこの日の如何ばかり樂しきかを知れども、エバの追放されたる子等は、この日の苦しみと惱ましさを哭くなり。

この世の日は僅かにして且つ悪しく、悲哀と艱難とに充てり。人はこゝに於て多くの罪に汚され、おほくの情慾に捉へられ、おほくの恐怖に阻まれ、おほくの心勞に責められ、多くの疑問に



亂され、多くの虚妄にまつはられ、多くの誤りに圍まれ、おほくの苦勞につかれ、誘惑に壓せられ、快樂のために弱められ、窮乏のために窘めらるゝなり。

あゝ何時此等の禍ひは終はらん。何時われは罪惡の慘ましき束縛より解かれん。主よ何時われは只なんぢのみを思はん。何時われは汝に於て十分歡ばん。何時われは何の障害もなく、心身の何の煩ひもなく、眞の自由を享けん。何時われは堅き平安、亂されずして定かなる平安、内の平安と外の平安、全く確かなる平安を得ん。

善き耶蘇よ、何時われは立ちて汝を見ん。何時われは汝の國の榮光を眺めん。何時なんぢは我にむかひ萬の物に於て萬の事となりたまはん。あゝ何時われは汝がなんぢの愛する者のために永遠より備へたまひし汝の國に於て汝とゝもならん。われは日毎の戦ひと大なる災難とのある仇の國に於ける憐れなる追放の人として残り。わが追放をなぐさめたまへ。わが悲哀をやはらけたまへ。そは我が望みは全く汝をしたひ喘けばなり。

慰藉としておよそ此世の與ふるものは皆われに重荷なればなり。われは我が心の心に於て汝をたのしまんと願へども、汝を捉ふること能はざるなり。われは天のものを抱かんことを慕へども地の心勞と死せざる情慾とは我を壓するなり。われ心にては凡てのものゝ上にいでんと欲すれども、肉のために我は心ならずも此に屈服せしめらるゝなり。斯くわれは惱める人にして、己れと戦ひ、自ら重荷となれり。而して我が靈は上ならんと欲すれども、我が肉は我を下らしめんと欲するなり。

あゝわれ心のうちに天のものを思ひめぐらす時、内心に苦しむこと如何ばかりぞや。またわれ祈る時直ちに肉の思ひの群われを圍むなり。わが神よ、なんぢ我に遠ざかりたまふ勿れ、また怒りて汝の僕をとほざけ給ふなかれ。なんぢの電光をうちいだして彼等をちらし、なんぢの矢をはなちて仇の虚しき念ひを凡て惑亂せしめたまへ。わが心を汝に立ちかへらしめ、我をして凡て世のことを忘れしめ、我が肉感の夢を速かに悔蔑をもつて棄て去ることを得しめたまへ。なんぢ永遠の眞理よ、われを強め、虚妄をして我を動かすことなからしめ給へ。なんぢ天の甘美よ、來たりて凡て潔からざるものをして汝の顔のまへより逃げ去らしめ給へ。



またわれ祈禱に於て汝よりほかのことを思ふごとに、我を宥し、憐憫をもて穩かに我をあしらひ給へ。そは實にわれは屢ころの亂され易き者なることを懺悔すればあり。即ち我は身體の起坐せるところにあらすして、却つて我が思ひの我を移せるところに在ること實にしばしくなり。わが思ひのあるところに我もまたあり。わが愛情のあるところに概ね我が思ひもまたあるなり。おのづから喜悅を齎らすもの、或は習慣によりて楽しくなれるものは、われに起りやすし。

これに就て眞理にまします我は明らかに云ひたまへり。即ちなんぢの財寶のある所には汝のころもあるべしと。<sup>10</sup> われ若し天を愛せば、好みて天のことを思ふなり。われ若し世を愛せば、世の幸福を悦び、その不幸を哭くなり。われ若し肉を愛せば、肉のことを屢おもふなり。われ若し靈を愛せば、靈のことを思ふを悦ぶなり。そは凡そ我が愛するところのものは、われ此を語り此を聞くを悦び、而して此に就ての觀念を身に携へて歸るべければなり。

されど主よ、なんぢの爲に凡ての造られたるものに訣別し、明らかなる良心をもつて汝にきよ

き祈禱をさしけ、地上のものは内にも外にも處を見出すこと能はざる天使の合唱のうちに入るに足るものたらんが爲に、生れながらの性を虐へ、また靈の熱誠によりて肉の慾を十字架につくる人は福ひなるかな。

#### 第四十九章 永遠の生命を願ふこと、及び努力する

者に約束せられたる大なる報酬に就て

子よ。なんぢ永遠の幸福を願ふ心の上より汝に注がれ、回轉の影もなき我が輝きを眺め得んがために、肉體の幕屋より脱れんことを願はば、なんぢの心を廣く開き、なんぢの願望をつくして此聖き靈感を受くべし。斯くへりくだりて汝をあしらひ、憐憫もて汝にのぞみ、なんぢを興こして熱烈ならしめ、汝自らの重さによりて地上のものに沈まんことを恐れ、力を以つて汝をさへ



給ひし天の恵みに對して大なる感謝をさゝぐべし。そは汝はなんぢ自らの勉學または努力によりてに非らず、全く天の恩寵と神の愛顧との寛護によりて此を受くればなり。これ汝が徳と更に大なる謙虛とに於て進歩をなし、來らんとする争鬪のために自ら備へ、なんぢの心の愛情をつくして熱心にわれに縋らんと努め、熱烈なる志をもつて我に仕へ得んがためなり。

二

子よ。火はしばぐ燃ゆれども、煙なくして焔はのほらざるなり。その如く或る人の願望は天にむかひて燃ゆれども、肉情の誘惑なきこと能はず。この故に彼等は、神にさゝぐる懇願に於ても、その做すところは、専ら神の榮のためにあらざるなり。いたく熱心なるが如くに裝ふ汝の祈願もまた往々斯くの如し。そは己が利害を混へたる汝の祈願は純ならず完からざればなり。

なんぢにとりて楽しく利益あることを願はずして、我が心にかなひ我が榮となることを願ふべし。そは汝の判断もし正しくば、なんぢは己が願望もしくば如何なる望まじきものにも従はずし。

て、我が定むるところを擇びて是に従ふべきものなればなり。

われは汝の願望を知り、なんぢの呻吟をしばぐ聞けり。既に汝は神の子たちの光榮の自由に入らんことを望めり。既になんぢは永遠の家なる天の歡ばしき祖國を悦べり。されどその時はいまだ來らずして、相反する時なほも残れり。これ即ち戦ひの時なり、勞苦と試練との時なり。なんぢは最高の善にて充たされんことを欲すれども、未だこれに達すること能はず。われは在り、神の國の來たるまで我を俟つべしと主は云ひ給へり。

なんぢは尙ほ地にありて試みられ、多くのことに訓練せらるべきなり。慰藉は時として汝に與へられん、されど其充實は許されざるべし。この故に天性の好まざることを做すにも忍ぶにも、共に強く勇ましかれ。新しき人を着、別人に變はるべし。

なんぢの欲せざることを屢爲し、汝の欲する事を爲すこと勿れ。他人を喜ばすことは榮え、汝を喜ばすことは前途の望みなかるべし、他人の云ふところを聽くべし、汝のいふことは無きもの



、如く思ふべし。他の人は願ひて受け、汝は願ひて獲ざるべし。他の人々は人に讃められて大なりとせられん、されど汝に就ては何ごとも云はざらしむべし。他の人々に此事或は彼の事ゆだねらるべし、されど汝は要なきものとせらるべし。斯かる時に人の天性は時として悩むべし、されど汝もし黙して此をしのばし、これ大なる事なり。主の忠信なる僕は此等のこと及び此等に類する多くのことに於て試みられ、如何ばかり凡ての事に於て己れに克ち己を挫き得るかを見らるゝなり。なんぢの意志に反する事を見て此に耐ふるにまさりて、己れに死すべき必要あるもの殆んどあらざるなり。汝にとりて不便または無用に見ゆることの命令として汝に課せらるゝ時には殊に然り。また汝は權威の下にありて敢て高き力に抗はざるがゆゑに、他人の指揮のもとに歩み、而して凡て己が意見を棄つるは困難と見ゆるなり。

されども子よ、此等の苦役の結果と、いと近き終局と、極めて大なる報酬とを思ふべし、さらば汝は此を忍ぶに咄くことなく、却つて忍耐のうちに最も強き慰藉を得ん<sup>10</sup>。そは今なんぢが進んで棄つるところの汝の意志の代りとして、汝は常に天に於て汝の意志を果たし得なければなり。彼處に汝は凡てなんぢの欲するところ、凡て汝の願ひ得るところのものを見出さん。彼處に汝は

凡ての善きもの、汝の手のうちにありて、これを失ふ恐れなきを見出さん。彼處に汝の意志は我が意志とつね一にして、何等外部の物または私利を願はざるべし。彼處に汝に抵ひ立つものなく、汝を咄くものなく、汝を妨ぐるものなく、汝をさへぎるものなく、願ひ得る凡てのもの共に備はりて彼處にあり、而して汝の愛情を全く新らたならしめて縁までこれを充たさん。彼處にわれはなんぢの忍びし誹謗に對して、汝に榮光をあたへ、患難に對して讚美の衣をあたへ、最も賤しき位に對して永久に王座を與へん。彼處に服従の果は見られ、懺悔の苦行は歡び、屈従は榮光の冠を得ん。

されば今は凡ての人の下に自らを屈服せしめ、何人の此事を云ひ彼の事を命ずるとも心にかくること勿れ。たゞ殊に心を注むべきは、汝の教長あるひは身下の者あるひは同輩のもの、如何なることを汝に求め、若しくは單に希望を込めかすとも、凡て快くこれを容れ、眞摯なる決心をもつて此を成し遂げんと努むることなり。

或る者は此を求め、或る者は彼を求む、或る者は此事に誇り、或る者は彼の事に誇り、千たび



萬たび讃められん、されど汝は此をも彼をも歡ばず、たゞ自らを輕んじ、我が旨にかなひ我を崇むることのみを歡ぶべし。

生命をもつてするも死を以つてするも、神のつねに汝によりて崇められんこと、これ汝の願ふべきものなり。

## 第五十章 寂寞の人は己れを神の手に置くべし

主なる神にして、聖き父よ、今もいつまでも汝は讃むべきかな、そは汝の聖旨は果たされ、また汝の爲し給ふことは善なればなり。なんぢの僕をして己れ若しくは他の如何なるものをも歡ばずして、汝を歡ばしめたまへ。そはあゝ主よ、汝のみ眞の歡喜なり、汝は我が希望また我が冠なり、汝は我が喜悅また我が榮えにましますべしなり。

なんぢの僕の有てる物に何か汝より受けざる物ありや、これさへも何等おのが功績によるに非ざるなり。なんぢの與へたまひしもの、また汝の造り給ひしものは皆なんぢのものなり。

われは貧しくして幼きよりなやみの裡にあり、而して我が魂は悲しみて時には涙をさへ流すに至る。また時として我が靈は壓し迫る患難のために亂ることあり。われは平安、即ち汝が慰藉の光にて養ひたまふ汝の子等の平安の歡喜をねがふ。なんぢ若し平安を與へたまはゞ、汝もし聖き歡喜をわれに注ぎ給はゞ、汝の僕の魂は調に充たされ、虔しく汝を讚美せん。されど汝のしばしば爲し給ふごとく、汝もし自ら退きたまはゞ、彼は汝のいましめの道を走ること能はず、却つてその膝を屈し、その胸をうたん、そは今は汝の燭火かれの頭のうへにかゞやき、なんぢの翼の蔭のしたに護られて、彼を襲ふ誘惑を免れし昨日および曩の日と異なればなり。



あゝ正しくして常に讚美すべき父よ、なんぢの僕の試らるべき時きたれり。あゝ愛する父よ、この時なんぢの僕のため<sup>9</sup>に苦しむは宜きなり。あゝ永遠に崇むべき父よ、汝がその來るべきことを豫め永遠より知りたまひし時きたれり。これ汝の僕が暫く外部に悩むも、内部にては常に汝とも生きんがためなり。即ち彼は暫くの間かろんぜられ、卑くせられ、一人の眼につくことなく、患難と心勞とに憔悴すべし、これ新しき光の曙に於て汝とも再び起き、天に於て榮光を受けんがためなり。

聖き父よ、なんぢは斯く定め、また汝は斯く欲したまへり、而して汝の命じたまひし如く成れり。そは汝の友が汝を愛するがため、汝のゆるしたまふ度毎に、また汝の定めたまふ人々によりこの世に於て悩み苦しむは、これ汝の友に對する恩寵なればなり、なんぢの聖旨と攝理となくして、また原因なくして、何事も地におこることなし。主よ、我をして汝の正しき審判を學び、心の凡ての傲慢と凡ての僭越とを棄て去らしめんがために、汝のわれを卑くしたまひしは我によきことなり。我をして人にむかひてに非ず、汝にむかひて慰藉を求めしめんがため、耻わが顔をおほひしは我に益あり。われは又これによりて汝の測るべからざる審判の畏るべきことを學べり。

なんぢは邪なる者ととも正しき者を窘しめ給ふ、されども公平と正義とを缺き給ふにあらざるなり。なんぢ我が罪を假借せず、酷き答をもつて我を打ちする、内に外に悲哀をあたへ、艱難をおくり給ひしことを、汝に感謝す。

あゝ主なる我が神よ、天の下にわれを慰め得る者なんぢのほか<sup>10</sup>に有ることなし。なんぢは魂の天醫にして、打ちて癒やし。陰府に伴ひくだり、また伴ひ歸りたまふ。なんぢの懲誡わが上にあり、なんぢの杖われをしへん。あゝ愛する父よ、見そなはせ給へ、われは御手のうちにあり。われは汝の懲誡の杖の下に身をかがむ。われ我が曲がれるを聖意に屈せしむるやう、わが背とわが頸とを打ちたまへ。

なんぢの常に我に恵みふかく在したまふごとく、我をして忠信にして謙虛なる僕たらしめ、斯くてなんぢ若し差し招きたまはし、何時にても進んで行かしたまへ。なんぢの懲誡にわれは自らと我がものを悉く委ぬ。この世に於て罰せらるゝは後の世に於て罰せらるゝよりも善きなり。なんぢは凡てのことを夫々知り給へり。而して人の良心にあるものにして汝に隠るゝものあるこ



となし。事いまだ兆さざるさきに汝はこれを知りたまへり。また汝はこの地上に行はるゝことに就て何人にも教へられ諭さるゝを要し給はざるなり。なんぢは我が進歩のために宜きものと、また罪の鏑を擦り落すために患難の如何ばかり有用なるかを知りたまへり。願くは汝のみこころのまゝに我をあしらひたまへ、これ我が願ふところなり。また只なんぢのほか良く且つ明らかに知るものなき我が罪ふかき生命を軽んじたまふこと勿れ。

主よ、願くは我をして知るべきものを愛し、愛すべきものを愛し、汝の最も嘉みし給ふものを讃め、汝にとりて貴きものを尊重し、汝の眼に潔からざるものを憎ましめたまへ。願くは我をして肉眼の見るところによりて審判せず、無知なる人々の耳の聞くところによりて宣告を下さず、正しき審判をもつて眼に見ゆるものと靈のものとを辨へ、就中つねに汝の聖旨の向かふところを探らしめたまへ。

人の思ひは審判するに際して往々誤り、世を愛する者もまた只眼に見ゆるものを愛するよりして誤るなり。人は人々より大なりと思はるとも、何の優さることかあらん。偽る者偽る者に、虚

しき者虚しき者に、盲者盲者に、弱き者弱き者にへつらひ、而してへつらひつゝ欺き、その虚しき讚美によりて實は恥を被らすなり。そは凡ての人は汝の見そなはし給ふごとくにして、その他

の者たることなしと、謙へりくだ虚れる聖フランシスクス云ひをればなり。

## 第五十一章 高き職務を執るに力の缺くる時

### は自ら低き職務につくべきこと

子よ、なんぢは常に堅く立ちて徳を熱望し、また高き度の瞑想を固く持すること能はず、却つて汝の意志に反し厭ひながらも、往々原罪の墮落のゆゑに、劣れる物にくんだり、この朽つべき生命の重荷を負はざるを得ざるなり。

死すべき肉體を携ふる限り、汝は心の倦怠と憂愁とを感ずべし。この故に、汝は内にありては

屢肉の重荷を哭くべきなり、そは汝は絶えず靈の修業と神の瞑想とに自らを委ねることを得ざれ



ばなり。

斯かる時なんぢのために宜きは、賤しき外部の業に馳せ行き、善き行ひをもつて自らを力づけ堅き信頼をもつて我が來たること、上よりの愛顧を待ちのぞみ、我が再び汝に臨みて凡ての心勞より解き放つ時まで忍びて汝の追放と汝の心の乾燥なるとに耐ふることなり。そは我は汝をして汝の勞苦を忘れしめ、また内心の平靜を享けしむべければなり。われは聖書の樂しき野をなんぢの前に擴げ、なんぢの心をひろくして、我が誠の道を走り始めしめん。而して汝は云はん。今の時の苦難は、われらの上に顯れんとする後の榮光にくらぶるに足らずと。

## 第五十二章 人は自ら慰藉を受くるに足らず却つ

### て懲戒を受くべきものと思ふべき事

主よ、われは汝の慰藉をも、また何等靈の愛顧をも受くるに足らざるなり。この故になんぢ我

を貧しく淋しき狀に置きたまふとも、これ我に對する當然のあしらひなるなり。そはたとひ我れ涙の海を注ぎ得たりとするも、尙ほ汝の慰藉を受くるに足らざればなり。されば我は甚だしく又しばし汝の心にさからひ、多くの事に於て大罪を犯したれば、わが受くべきは鞭撻と刑罰との外に何ものもなきなり。

この故に若し事を正しく秤らば、我はいと小さき慰藉すらも受くるに足らざるなり。されどもあゝ聖業の亡ぶるを欲したまはざる恵みふかき憐憫に富みたまふ神よ、なんぢは憐憫の器にむかひて汝の恵みの富を示さんとて、實に汝の僕をその凡ての功績に過ぎ、人の業に超えて敢て慰めたまへり。そは汝の慰藉は人の慰藉の言のごとくにあらざればなり。

主よ、われ如何なることを爲したれば、なんぢ我に天の慰藉を與へたまふや。われは何の善をも爲したるを覺えず、たゞ常に罪に傾きて改むること遅かりしを知るのみ。これは眞にして、我は拒むこと能はず、もし我がいふところ此に反せば、汝はわれに逆ひて立ちたまひ、我を防ぐ者あらざるべし。わが罪のため我が受くべきものは、地獄と永遠の火とのほかに何かあらん。わが



は凡ゆる侮辱と輕蔑とを受くべきものにして、汝の敬虔なる僕たちのうちに數へらるゝに足らざること誠實に告白す。而して我は此を聞くを好まざれども、眞なるがゆゑに、自らに對し、我が罪を曝露し、斯くして一層良く汝の憐憫を獲るに足るものとならん。

我のごとき罪ありて惑亂を極むる者なにを云はんや。われは只この一語を發するほか口を有たざるなり、曰く、「主よ、われは罪を犯せり、我は罪を犯せり。願くは我を憐み、我をゆるし給へ。われ暗き地、死の蔭に蔽はれたる地に往くまへに、暫く我が悲哀を嘆くことを我にゆるしたまへ」と。

答ありて憐ましき罪人に汝の嚴しく求めたまふことは何ぞや。罪人の己が罪のために悔恨し自らへりくだることに非ずや。眞の悔恨と心の謙虛とにより赦罪の希望は生ずるなり、失はれたる恩寵は回復し、人は來らんとする怒りより免れ、而して神と悔ゆる魂とは聖き接吻をもつて相合ふなり。

あゝ主よ、へりくだりて罪を悔ゆる心は、なんぢの受けたたまふ獻物にして、乳香にもまさりて汝のみまへに遙かにかぐはし。

これは又なんぢの聖き御足に注がるゝを望みたまふ佳はしき香油なり。そは汝は碎けたる悔いしところを輕んじたまふことなければなり。

仇の怒りの顔を避くる處はこゝなり、これ無きがために招きたる如何なる罪と汚れと雖も、こゝに改められ又あらひ去らるゝなり。

## 第五十三章 神の恩寵は此世の智慧に恃む者

と一致せざること



子よ。わが恩寵は貴くして、外部の物または地の慰藉と混へらるゝを許さざるなり。この故に汝もし恩寵の注がれんことを願はば、凡て此を妨ぐるものを棄て去るべし。自らのために秘かなる處を選び、獨居をしたひ、何人よりも慰藉の言を求めず、寧ろ汝のこゝろを悔いしめ、汝の良心の純潔を保ち得んために、神に敬虔なる祈禱を注ぐべし。全世界を無きものゝ如く見做し、凡て外部の物に先んじて神に仕ふることを好むべし。そは汝はわれに仕ると同時に、過ぎ去るものを楽しむこと能はざればなり。知己親友より自らを遠く退け、なんぢの心に凡て此世の慰藉を拒むべし。されば尊き使徒ペテロは、基督の忠信なる者は此世に於て旅人また宿れる者のごとくすべしと切に求めたるなり。

あゝ世にある如何なる物に對する愛にも引き止められざる者の、死の時に有する安心は如何ばかりぞや。されど心の未だかよわき者は、一切のものより全く離脱すと云ふが如き思ひを悟ることを得ず、また肉につける人は靈につける人の自由を知ること能はざるなり。されども人もし眞に靈に屬するものとならんと欲せば、遠き者をも近きものをも棄て、人を警戒する如く自らを警戒すべし。

なんぢ若し全く己に克たば、すべて他のものを服従せしむること甚だ容易ならん。そは全き勝利とは、己れに勝つことなり、即ち己れを服従せしめ、官能の慾を理性に従はしめ、而して凡ての事に於て理性を我に服せしむる者こそ、これ自己の眞の征服者にして世界の主たるなれ。

## 二

なんぢ若し此高きに攀ぢのほらんと欲せば、丈夫のごとく出で立ちて斧を根に置くべし、これ自己と凡ての私利と物質の寶とに對する秘れたる邪慾を抜きとりて亡ほさんがためなり。この罪この自己を愛し過ぐる事よりして、全く根こぎにすべきもの殆んど皆生ずるなり。もし一たび克ちて此を服せしむる時は、直ちに大なる平和と安心と生ぜん。されど己れに全く死し、或は自己



を全く脱する者稀なるがゆゑに、人々は依然として自己に絆され、また靈によりて自己のうへに擧げらるゝこと能はざるなり。されど自由に我と、もに歩まんと欲する者は、凡てその腐りて邪なる情慾を殺し、また造られたる如何なる物にも、特殊の愛の憧憬をもつて縋るべからず。

### 第五十四章 天性と恩寵と働きの相違に就て

子よ、勉めて天性と恩寵との働きに心を注めよ。そはその働くさま甚だ相反して微妙なれば、内心の照らされたる靈に屬する者にあらざれば、殆んと辨へ難ければなり。

まことに凡ての人は善きことを欲し、その言と行とに於て幾分の善を裝ふなり、是によりて善の覆ひのために欺かるゝ者おほし。

天性は巧みにして多くの人を誘ひ、これを陥れて欺き、常に己れを目的とすれども、恩寵は眞直に歩み、すべて悪のたぐひに遠ざかり、欺瞞の下に隠れず、ひとへに神のために凡ての事を爲

し、また神を終極の安息となすなり。

天性は死すること、壓せらるゝこと、征服さるゝこと、服従すること、容易く屈従することを厭惡す。されど恩寵は自己を殺すことを學び、肉慾に抵抗し、服従することを求め、負くることを欲し、己が自由を揮はんことを願はず、懲戒の下に置かるゝことを好み、何人をも治むることを欲せずして、常に神の下に生き、立ち、居らんことを欲し、神のために直ちにへりくだりて、凡て人の立てたる制度に服するなり<sup>2</sup>。

天性は己が利益のために争ひ、常に他より如何なる利を刈りとり得べきかを思へり。されど恩寵は己の利益となり便宜となることを思はずして、却つて多くの人の益となることを思ふ<sup>3</sup>。

天性は歡びて名譽と尊敬とを受くれども、恩寵はすべての名譽と光榮とを眞心より神に歸す。

生れがらの愛は耻辱と侮蔑とを恐る。されど恩寵の愛は耶蘇の名の爲に誹謗を受くる事を歡ぶ。



生れながらの愛は安逸と肉體の安息とを愛す。されど恩寵の愛は懶惰なること能はずして、快く勞苦を抱く。

生れながらの愛は精妙美麗なるものを所有せんことを求めて、低廉粗惡なるものを嫌惡す。されど恩寵の愛は質樸卑賤なるものを悦び、粗野なるものを輕んぜず、舊き縊縷を纏ふことを憚らざるなり。

天性は現世のものに眼をむけ、地につける利得を歡び、損失を悲しみ、些かの毒言によりて激せしめらる。されど恩寵の愛は永遠のものを眺みて、此世のものに縋らず、損失のために亂されず、また暴言のために心を痛めらるゝことなし、そは何ものも失はるゝことなき天にその寶と歡喜とを置きたればなり。

天性は貪婪にして與ふるよりも受くることを好み、私有にして己が所有たらんことを欲す。さ

れど恩寵の愛は深切にして人と親しみ、私利を避け、些かのものを以つて足れりとし、與ふるは受くるより福ひなりと斷ず。

天性は人をして造られし物と、己が肉と、虛妄と浮薄とに傾かしむ。されど恩寵の愛は人をして神と徳とに近づき、造られしものを斥けて世を避け、肉の慾を憎み、放逸を制し、公衆に見らるゝを羞づるに至らしむ。

天性は官能をたのしまし得る外部の慰藉を歡んで見出す。されど恩寵の愛は慰藉を神にのみ求め、凡て眼に見ゆるものを超えて、最高善を悦ばんことを願ふ。

天性は凡てのことを己れの利益のために處理し、無報酬にては何事をも爲すこと能はず、凡ての施與に對して、此と等しきもの、或は更に優されるもの、若しくは賞讚あるひは好意を獲んことを望めり、また己が行ひと、施與と、言との大いに貴ばれんことを甚く熱心に願ふなり。されど恩寵の愛は現存のものを求めず、報酬としては只神のほか何等の賃銀を要求せず、また永遠の



ものを得るために要するもの、外は、現世の必用物を求めざるなり。

天性は多くの友と親戚とを有することを喜び、門閥と血統とを誇り、權者に笑みを送り、富者にへつらひ、己れに似たるものを稱讚す。されど恩寵の愛は己が仇をさへも愛し、群なす友あるを以つて高ぶることなく、また權勢門閥も更に高き徳と結ぶにあらずば、これを顧みず、富者よりも寧ろ貧者を愛顧し、權力ある者よりも罪なき者に同情し、欺く者を歡ばずして眞實なる人を歡び、つねに善き人を勧めて優れたる賜物を慕はしめ、また徳によりて神の子に似たるものたらしむ。

天性は直ちに窮乏と困難とを訴ふ。恩寵の愛は心を堅うして貧窮に耐ふるなり。

天性は自己によりて凡ての事を審判し、己れのために努力し争論す。されど恩寵は一切を一切のもの、注ぎ出でし源なる神に歸し、一つの善をも己れに歸することなく、僭越にも傲らず、争はず、他人の説を斥けて己れの説を探ることなく、凡ての感情と思想とに於て、永遠の神慧智た

の裁斷とに自らを委ぬるなり。

天性は争ふて秘密を知り、新しきことを聽かんと欲し、屋外に出でて、多くのことを自らの官能によりて試めさんことを好み、人に認められ、賞讚と嘆美とを贏すべきことを爲さんと欲す。されど恩寵の愛は新しき事もしくは奇しきことを、聞かんとはせざるなり、そは是は凡て人の古き墮落より生ぜしものにして、地上には一として新しきものも永續するものもなきを知ればなり。

この故に恩寵の愛は、官能を制御し、虚しき満足と虚飾とを避け、當然賞讚嘆美せらるべきものを、へりくだりて蔽し、凡ての業と凡ての智識とより有益なる實と、また神の讚美と榮光とを求むべきことを教ふるなり。恩寵の愛は己れと己れに屬するものとの汎く傳へらるゝことを好まず、只愛よりして萬物を與へたまふ神の其賜物に於て讚美せられんことを欲するなり。

この恩寵の愛は天性を超えたる光にして神の特殊の賜物なり、また選ばれたる者の適はしき封印にして永遠の救ひの質なり、これは人を地より高めて天のものを愛するに至らしめ、また内よ



り離れて靈に屬する者たらしむ。この故に天性を壓服すること多ければ、恩寵の愛の注ぎ入れらるゝこと愈大なり、而して日毎に新しき愛顧によりて内なる人は神の像に改めらるゝなり。

## 第五十五章 人生の墮落と神の恩寵の力とに就て

### 一

あゝ主わが神よ、なんぢは汝の形像と肖像とに象どりて我を造りたまへり、願くは救ひのために斯くも重要にして必要なことを示し給ひしこの恩寵をわれに與へ、我をして罪と亡滅とに誘ふところの我が最も悪しき性情に克たしめ給へ。そは我が心の法のりに逆ひ、また我を虜にし多くの事に於て肉慾に従はする罪の法の我が肉に存するを覺ゆ、而して熾んに我が心のうちに注ぎ入れられし汝のいと聖き恩寵われを助くるにあらずば、我はその情慾に抵抗すること能はざればなり。

幼き時よりしてつねに惡に傾ける天性を服せしめんがために、主の恩寵を要し、大なる恩寵を

要するなり。そは人性は最初の人アダムにより罪のために墮落腐敗し、而して此汚濁の刑罰はすべての人類に傳はり、かくて汝により善くまた正しく造られし天性自らが今や罪惡と墮落せる天性の脆きを名指すものとなれり、これその性情は赴くまゝに委ねられて惡と劣れるものにと到ればなり。

即ち残れる些かの力は恰も灰のうちに埋もれたる閃光のごとし。これはかの生得の理性なり、大なる暗黒に圍まれ、凡てその嘉しとすることを成す力なく、またもはや真理の十分なる光を享けず、その愛情に健全を缺くと雖も、尙ほ依然として善惡を判断し眞偽を識別する力を有せり。

この故、あゝ我が神よ、汝の誠の善にして正しく且つ聖く、また凡ての惡と罪とを避くべきを諫むるを知るがゆゑに、われ衷なる人にては汝の律法を悦べり。されども我れ理性に従はずして情慾にしたがふ時は、肉にては罪の法のりにつかふるなり。この故に善を欲すること我にあれど、此を行ふことなればなり。この故にわれ屢おほくの善き事を志せども、わが弱きを助くる恩寵を缺くため、輕き抵抗に遇ひて退きて氣を失ふなり。この故にわれ完全の道を知り、如何に行すべ



きかを明らかに見ながら、われ自らの墮落の重さに壓せられて、更に完全なるものへ上らざるなり。

## 二

あゝ主よ、善き事を始め、これを進め、これを成就せんために、我にとりて汝の恩寵の全く必要なること如何ばかりぞや。そは恩寵なくば我は何事をも爲す能はず、されど汝の恩寵もし我を強くせば、我はなんぢに於て凡ての事をなし得るなり。

あゝ眞に天につける恩寵よ、此なくしては我等の行ひも空しく、天性の如何なる才能も數ふるに足らざるなり。技術も、富も、美も、力も、才智も、雄辯も、あゝ主よ、なんぢの恩寵なくば汝のまへに無力なり。そは天性の才能は善人も悪人も共に有つものなれども、選ばれたる者の特殊の賜物は恩寵と愛とにして、この封印を帯ぶる者は永遠の生命を受くるに足る者とせらるゝなり。この恩寵は秀れたるものにして、豫言の賜物も奇蹟の業も、また如何に高尚なる思索も、此

なくしては、何等の値價もあらざるなり。然かのみならず信仰も、希望も、その他の徳も、<sup>10</sup>恩寵となくば、汝これを受け容れ給はざるなり。

## 三

あゝ心の貧しき者をして徳に富ましめ、多くの財寶に富める者をして心を卑くせしむる最も尊<sup>いと</sup>き恩寵よ。願くは我にくんだり、汝の慰藉をもて早くわれに力づけ給へ、<sup>11</sup>恐らくは我がたましひは心の疲勞と乾燥とのために萎え衰へん。

主よ、われをして汝のまへに恩寵を得させ給はんことを汝に懇願す。そは天性の欲するところの他の物は獲られずとも、汝の恩寵われに足ればなり。<sup>12</sup>たとひ我れ多くの患難に試みられ惱まさるゝとも、汝の恩寵にして我と共にある間は、われは禍を恐れざるべし。これは我が力なり、これは勸告と援助とを與ふ。これは凡ての仇よりも強く、凡ての智者よりも智し。



これは眞理の女教師、懲戒の教師、心の光、患難の時の慰藉、憂鬱を拂ふ者、恐怖を醫やす者、信仰の襟母、涙の泉なり。この恩寵なくば我は如何なる者ぞや、たゞ一片の枯木、また棄てらるべき無用の枝のみ。<sup>13</sup>この故に、主よ、汝の恩寵をして常に我が先となり後とならしめ、絶えず我をして善き行を爲さしめ給はんことを、聖子耶穌基督によりて希ひたてまつる。アーメン。

## 第五十六章 己れに克ち十字架によりて基督

に倣ふべきこと

三

子よ。なんぢ己れを脱すること多きに從ひ、我に移り得ること愈多かるべし。外物を願はずば内心を平安ならしむる如く、内心に己れを棄つれば、汝を神に結ぶなり。背くことなく泣くことなく、全く己れを棄て、我が意に從ふことを學ぶやう、われは尙ほ汝に望む。

なんぢ我に從へ。われは道なり、眞理なり、生命なり。道なくば行くものなく、眞理なくば知るものなく、生命なくば生くるものなし。われは汝の從ふべき道、汝の信すべき眞理、汝の望むべき生命なり。

われは侵すべからざる道、謬ることなき眞理、限りなき生命なり。われは眞直なる道、至高の眞理、眞の生命、たふとき生命、造られざる生命なり。汝もし我が道に居らば、眞理を知らん、而して眞理は汝に自由を得させ、而して汝は永遠の生命をとらへん。

なんぢ若し生命に入らんと思はゞ誠をまもれ、なんぢ若し眞理を知らんと思はゞ、我を信ぜよ。汝もし全からんと思はゞ、凡てのものを賣るべし。汝もし我が弟子たらんと思はゞ、己れを棄つべし。汝もし福ひなる生命を有せんと思はゞ、この此世を輕んずべし。汝もし天に於て高くせられんと思はゞ、世に於て自らを卑くせよ。汝もし我とよにも王たらんと思はゞ、我とよにも十字架を負ふべし。そはたゞ十字架の僕のみ幸福と眞の光との道を見出すべければなり。



## 二

あゝ主耶蘇よ、なんぢの生涯は貧しく且つ世に侮られたれば、願くは我をして世の輕蔑を受くるとも、汝に倣はしめたまへ。そは僕はその主にまさらず、弟子はその教師にまさらざればなり。汝の僕を汝の生命によりて訓練せしめたまへ。そはこの中に我が救ひと眞の聖潔とあればなり。この外に我が讀み或は聞くことは凡て、我に十分なる休養と喜悅とを與へざるなり。

## 三

子よ、なんぢ既に凡て此等のことを知り且つ讀みたるが故に、これを行はゞ福ひならん。わが誠を保ちて此を守る者は、即ち我を愛する者なり、我もこれを愛し、これに己れを顯すべし。<sup>10</sup>また彼をして我が父の國に於て我と共に坐せしめん。<sup>11</sup>

あゝ主耶蘇よ、なんぢの云ひ且つ約束し給ひし如く我にあれかし、また我をして此恩寵を受くるに足るものたらしめ給へ。われは十字架を受けたり、これを汝の御手より受けたり。われは此を負はん、汝の我に置きたまひしまゝに、死に至るまでも此を負はん。まことに善き修道僧の生涯は十字架なり、されど此は天國への榮なり。われらは既に始めたり、退くは宜しからず、また棄て去ることも宜からざるなり。

## 四

さらば兄弟等と共に進まん。耶蘇は我等と共に在したまはん。耶蘇のために我等はこの十字架を探れり。耶蘇のために我等は十字架に耐へ忍ばん。我等の導者にして先驅者なる彼は、我等を助くる者なり。見よ我等の王は我等に先だちて行き、我等のために戦ひたまはん。<sup>12</sup>我等をして勇ましく従ひ、何人も恐怖をおそれず、いさぎよき戦死の覺悟をなさしめよ、また十字架を棄て、逃ぐる如き汚辱を、我等の光榮のうへに齎らさざらしめよ。



## 第五十七章 過に陥るとも甚しく氣を落すま

## じきこと

子よ、順境にありて大なる慰藉と信仰とを有するよりも、逆境にありて忍耐と謙虚とを有するは、我がねがふところなり。何故になんぢは凡て汝を誹る些かなる事のために憂ふるや。たとひ誹謗更に甚だしかりしとするも、汝は心亂さるべきに非ざるなり。さらば今心にかくること勿れ。これは最初にもあらず、また新しき事にもあらず、また汝生きつづければ、これ最後にもあざるべし。なんぢは汝の道に何等の患難の來たらざる間は、十分勇敢なり。汝はまた善き忠言を與へ、言をもつて他人を強むることを得るなり。されど患難の俄かに汝の門口に來たる時、なんぢは勵ますことも強むることも能はざるなり。汝の脆きことの大なるを良く心に注むべし、これ屢さしやかなる惱みに於て汝の經驗するところなり。

されども斯くの如き類の試練の起る時は、即ち汝の益なり。力を盡して心より我が十字架の苦しみを想ひ出すべし。また患難もし汝をなやますとも、汝をうなだれしめ、或は久しく汝をくらしましむること勿れ。なんぢ若し歡んで此に耐ふること能はずば、少くとも忍んで此に耐ふべし。たとひ聞くに苦しく憤怒をおこすことありとも、自ら制して、嬰兒をつまづかすべき怒りの言を汝の口より出でしむること勿れ。

いま起りし嵐は速かに静まり、内心の憤激は恩寵の復歸によりて和けられん。主は云ひ給へりわれは尙ほ活く、なんぢ若し汝の信頼をわれに置き、熱心にわれを叫び求めば、われは直ちに汝を助け、恒にまさる慰藉を汝にあたふべしと。尙も静かなれ、而して更に大なる忍耐に身を鍛ふべし。

たとひ汝自ら屢くるしみに遇ひ、或は劇しく誘はると感ずるとも、凡てのものも英ひしには非ざるなり。なんぢは人にして神にあらざるなり。汝は肉にして天使にあらざるなり。いかで汝は常に徳の同じ状態にあるを得んや、斯くの如きことは、天にある天使にも、また樂園に於ける最



初の人にも許されざりしなり。われは憂ふる者を引きおこし安全ならしむる者なり、また己れの弱きを知れる者を進めて我が神性に至らしむ。

主よ、なんぢの言はたふときかな、我が口は蜜よりも蜂の巢の滴りよりも甘し。なんぢの聖き言をもつて我を慰め給はざりしならば、此等の大なる患難困苦に於て、我は如何にせしぞや。たゞ若しわれ遂に救ひの港に達するを得ば、何ぞ我が苦しみの種類と程度とを論ぜんや。われに善き終極をあたへ、此世を去る福ひなる徑をあたへ給へ。あゝ我が神よ、願くは我をおほえて、汝の國に至る直き道に我をみちびき給へ。アーメン。

## 第五十八章 高遠なる事と神の秘かなる審判

とを穿鑿すべからざること

子よ。心して高遠なる事もしくは神の秘かなる審判に就て論じ、何故に此人は捨てられて、彼人は斯く大なる愛顧を被るや、また何故に一人は斯く悩まされて、他の一人は斯く著しく高めらるゝやと云ふこと勿れ。此等のことは全く人の才能の及ばざるところにして、また如何なる理論も議論も神の審判を究めつくすこと能はざるなり。

この故に仇もし此等のことを汝に告げ、或は奇を好む人これらの事を問ふことあらば、豫言者とともに答ふべし。「主よ、なんぢは義しく、なんぢの審判はなほし」と、更にまた答ふべし。「主の審判は眞實にして悉く正し」と。わが審判は畏るべく、争ふべからず、是人智をもつて悟り得ざるものなればなり。

また聖徒の徳功を究め論じて、その何れが他の者よりも聖なりや、或は何れが天國に於て大な



りやと云ふこと勿れ。斯くの如きことは往々争ひと無益なる議論とを生ぜしめ、また傲慢と虚榮とを養成し、これより嫉妬と分離とを生じ、一人は傲然として一人の聖徒を崇め、他の一人は他の一人の聖徒を崇むるなり。されど斯くの如き事を知り且つ究め盡さんとする願ひは無益にして却つて聖徒の心を痛ましむ。そは我は亂れの神にあらず、平和の神なればなり、この平和は自尊にあらずして、却つて眞の謙虚によれり。

或ひは愛の熱烈なるにより更に充ちたる愛情をもつて此聖徒または彼の聖徒に心ひかるゝ者あれども、それは寧ろ人間の愛情にして神の愛情にはあらずなるなり。われは凡ての聖徒を造りし者なり。われは彼等に恩寵を與へたり。われは彼等に榮光をあたへたり。われは各の徳功の如何なるかを知り、われは善き賜物のめぐみをもて彼等をむかへたり。われは世の始めに先だちて豫め我が愛する者を知れり。われ彼等を世より選びたり、彼等まづ我を選びしにあらずなるなり。われ彼等を恩寵によりて呼べり。われ彼等を憐憫によりて招けり。われは様々なる誘惑を通じて彼等を安全に導きたり。われは榮ある慰藉を彼等に注ぎたり。われは彼等に耐忍をあたへたり。われは彼等の忍耐に冠をかぶらせたり。われは最初のものとして最後のものとを知れり。われは測り難き

愛をもつて凡てを抱く。われは凡ての我が聖徒に於て讃めらるべきものなり。何等先だてる徳功なきに關らず、我が斯く榮光をもつて高め且つ豫定せし凡ての人に於て、われは凡てのものに超えて尊び崇めらるべきものなり。

この故に我がいと小さき者のひとりや侮る者は、最も大なる者を敬はざるなり。そは我は小なる者をも大なる者をも造りたればなり。而して聖徒のひとりや誹る者は、我とまた天國に在る凡ての者とを誹るなり。

彼等は皆愛の絆にて一つとなり、その思想も同じく、意志も一つなり、而して愛により 皆一つに結ばる。而して更に遙かに高きものあり、即ち彼等は己れと己が如何なる徳功にもまさりて我を愛するなり。そは彼等は自ら恍惚となり、己れを愛する念を離脱して、我を愛することに全身を投じ、また我のうちに充ち足りて休息すればなり。彼等を退かしめ、或は彼等を壓しつけ得るものとは一も有ることなし。そは彼等は永遠の眞理に充ち、熄えざる愛の火をもつて燃ゆればなり。



この故に己れ自らの歡喜のほか何ものをも愛すること能はざる肉につける獸性の人々をして、聖徒の状態を論ずる事を控へしめよ。彼等は永遠の真理の意向を顧みず、己れの想ふまゝに増減す。無知なる者多し。たゞ僅かに光を受け、完全なる靈の愛をもつて殆んど何物をも愛すること能はざる者は殊に然り。彼等は尙ほ生れながらの愛情と人間の友情とのために、此人または彼の人に多く心を引かれ、而して下界のものに於て自ら得たりしことによりて、天のものに就ての彼等の想像をつくるなり。されど完からざる人の想ふところのものと、光に照らされたる人の上よりの啓示によりて見るところのものとの相違は測りがたし。

この故に、子よ、心して汝の智識に過ぎたる奇しき事をあけつらふことなく、寧ろ神の國に於て最も低き位置にても得んことを以つて、なんぢの業務たらしめよ。たとひ誰が他にまさりて聖く或は誰が天國に於て最も大なるものとせらるゝかを知る人ありとも、斯くして自ら我が前にへりくだり起ちあがりて更に大なる讚美を我が名にむかひて獻ぐるにあらずば、この智識も彼に何の益あらんや。これに優さりて遙かに神の喜びたまふは、己が罪の大なること、己が徳の小なることを思ひ、また聖徒の位の優劣を論ぜずして、己れの聖徒の完全を去ること如何に遙かなるか

を思ふ者なり。虚しき考究により、聖徒の秘義に就て穿鑿するよりも、敬虔なる祈禱と涙とをもつて聖徒たちに懇願し、心を卑くして彼等の祈願を乞ひ求むるは宜きなり。

人もし自ら安んじて虚しき議論を控へなば、聖徒たちは良く然り行く安んずるなり。彼等は己が徳功に誇ることなし、そは我が限りなき愛より凡ての物を與へたる我に一切を歸し、一つの善をも己れに歸することなければなり。彼等は神をいたく愛する心と、溢るゝ歡喜とに充つれば、如何なる幸福も缺くことなし。

すべて聖徒はいよく、高き榮光を受くるに従ひ、ますく、自らへりくだり、いよく、ますく、我に近づき愛せらる。この故に汝は録したまへり、彼等はおのれの冠を神のまへに投げ出し、小羊のまへに跪伏して、世々限りなく活きたまふ者を拜せりと。



入おほく神の國に於て他より大なる者は誰ぞやと問へり、彼等は自ら最も小なる者のうちに數へらるゝに足るべきや否やを知らざるなり。天に於て最も小なる者となることすらも大なる事なり。天に於ては凡ての者大なり。そは彼等は皆神の子と稱へられ、また神の子となるべければなり。小さきものは千となり、<sup>9</sup>而して百歳の罪人も死すべし。<sup>10</sup>

即ち弟子達が天國に於て最も大なる者は誰ぞやと訊ねし時、彼等の受けし答は次の如きものなりき。「もし汝らひるがへりて、幼兒のごとくならずは天國に入るを得じ、されば誰にてもこの幼兒のごとく己れを卑くする者は、これ天國に於て最も大いなる者なり」と。<sup>11</sup>

幼兒と共に進んで自らへりくだることを肯んぜざる者は禍なるかな。そは天國の低き門は彼等を入れざるべければなり。また此世に慰藉を有する富者は禍ひなるかな、<sup>12</sup>そは貧しき者の天國に入る時かれらは外に立ちて哭くべければなり。なんぢら謙虛れる者よ、<sup>13</sup>歡べ、また汝等貧しき者は歡喜に充てよ。そは汝等若し苟しくも眞理に歩まば、<sup>14</sup>神の國は汝等のものなればなり。

## 第五十九章 我等の希望と信頼とは凡て神に

### のみ置くべきこと

主よ、この世に於て我が信頼すべきものは何ぞや。また天の下にある物より我が得るところの最も大なる慰安は何ぞや。あゝ主なる我が神よ、これは汝にあらずや、汝の憐憫は數へがたし。

われ汝を離れて何處に福ひなることありしや。また汝かたはらに在して何時われは不幸なることありしや。われは汝を離れて富まんよりは、寧ろ汝のために貧しかるべし。われは汝を離れて天を我がものとするよりも、寧ろ汝とともに地上の旅人とならん。汝のいますところ、これ即ち天なり、汝のいまさる處には死と陰府とあり。なんぢは凡ての我が願望なり、故に我は必ず汝にむかひて、嘆き、叫び、また熱心に祈らざるべからず。言をつめて云へば、我が十分に信頼し得る者とはなく、必要の時に機にかなふ援助を我れにあたふる者とてもなし、たゞ我が神な



る汝あるのみ。なんぢは我が希望なり。汝は我が信頼なり、汝はわが慰め主にして、凡ての事に於て極めて誠實にまませり。

人は皆おのれの事をもとむ。汝は我が救ひと我が益のみを願ひ、凡てのものを我が益とならしめ給ふ。なんぢは我をさまざまなる誘惑と患難とにあはせ給へど、凡てこれを我が益とならしめ給ふ。なんぢは數多の方法によりて、汝の愛する者を常に試みたまふなり。而して此試練のうちにありて我等は、なんぢが溢るゝ天の慰藉を以つて我を充たし給ひし時の如くに、汝を愛し、また讚美すべきなり。

この故に主なる神よ、われは我が全き希望と避處とを汝に置き、我が凡ての患難と懊惱とを汝に委ねん。そは凡そ我が見るところのものは、汝を除きては、すべて弱くして定かならざるを我れ見出せばなり。即ち我自ら助け、強め、慰め、教へ、また護りたまふにあらざれば、多くの友も益するところなく、強き援助者もたすくるに由なく、愼みある助言者も益ある答を爲すこと能はず、學者の書も慰藉をあたへず、如何なる貴き寶も我を救はず、また如何なる祕かにして聖き處

も、汝自ら援助し、強め、慰め、教へ、また護り給ふにあらざれば、避處とはならざるなり。そは平安と幸福とを齎らすと見ゆる凡てのものは、汝によらざれば無にひとしく、而して實は少しも幸福を齎らざればなり。

この故に汝は凡ての善の窮極、生命の絶頂、凡て言に表はし得るもの、奥底なり。而して凡てのものを超えて汝に希望を置くことは、なんぢの僕等の最も強き慰安なり。われ我が眼をなんぢにむかひて舉ぐ、わが神、即ちもろくの慈悲の父よ、われは我が信頼を汝に置く。願くは天の祝福をもつて我が魂を祝して潔め、これを汝の聖殿となし、また汝の永遠の榮光の座となし給へ。而して汝の尊き眼を瀆すべきものを一つも汝の神聖なる此宮のうちにあらしめ給ふこと勿れ。なんぢの仁慈の大なると、汝の憐憫の多きとによりて我をかへりみ、遠く死の蔭の地に追ひやられたる汝のいやしき僕の祈禱をきたまへ。この朽つべき世の凡ての危難のうちにある汝のいやしき僕の魂を防ぎ護りたまへ。また汝の恩寵を以つて我が魂に伴ひ、平安の道に沿ひて此をみちびき永遠の日の故郷に到らしめ給へ。アーメン。



註

解



# 第一篇

## 第一章

- 1 ヨハネ傳八の一・二。
- 2 ヨハネ黙示録二の一・七。
- 3 中命記六の一・三。マタイ傳四の一・〇。傳道之書一の二。
- 4 傳道之書一の八。

## 第二章

- 1 アリストテレス「形而上學」一の二。
- 2 コリント前書一三の二。



3 ロマ書一の一〇。

4 *Ana nesciri* (知られざることを望むべし)といふ言は聖ベルナルドの書にあり。これは「共同生活の兄弟團」の間に愛用されし句なりき、この箇處の全文 *ana nesciri et pro nihilo reputari* はアケムピスの他の書 *The Little Alp'abet of a Monk* のうちにある。

### 第三章

1 聖アウグステイヌス懺悔録第九篇第十章参照。

2 エレミヤ記五の二一。マタイ傳一三の一三。ヨハネ傳二二の四〇。

3 ヨハネ傳一の一。同八の二五。

4 ロマ書一の二一。

5 ビリビ書三の八。

### 第五章

1 詩篇一一七の二。

2 ロマ書二の一。ヘブル書一の一。

### 第七章

1 ペテロ前書五の五。

2 エレミヤ記九の二三、二四。コリント前書一の三一。コリント後書一〇の一七。

### 第十章

1 マルコ傳一四の三八。

### 第十一章



- 1 詩篇一二二の一、二。
- 2 ルカ傳三の九。

第十二章

- 1 ビリビ書一の二三。

第十三章

- 1 ヨブ記七の一（七十人譯に據る。）
- 2 ペテロ前書四の七。
- 3 同五の八。
- 4 Ovidius: de Remedia Amoris. 91.
- コリント前書一〇の一三。

- 6 ペテロ前書五の五、六。

第十四章

- 1 マタイ傳七の一。

第十五章

- 1 コリント前書一三の三。
- 2 同二三の五。

第十六章

- 1 ガラテヤ書六の二。



2 箴言三の七。

## 第十七章

- 1 ヨハネ黙示録二の一〇。
- 2 歴代志略上二九の一五。詩篇三九の二二。ペテロ前書二の二一。
- 3 コリント前書四の一〇。

## 第十八章

- 1 コリント後書一一の二七。同二二の二〇。
- 2 ヨハネ傳一二の二五。

## 第十九章

- 1 箴言一六の九。
- 2 エレミヤ記一〇の二三。
- 3 ロマ書八の一八。
- 4 ルカ傳一二の四三、四四。

## 第二十章

- 1 セネカの書簡七にある句よりの引用。原句は *Auarior rede, ambitiosior, luxuriosior, immo uero crudelior et inhumanius, quia inter homines fui.*
- 2 ヨハネ傳五の一三。ルカ傳五の一五、一六。
- 3 詩篇四の五(維典譯 *In cubilibus vestris compungimini.*)
- 4 詩篇六の七。
- 5 ヨハネ第一書二の一七。
- 6 箴言二三の三一、三二。



7 詩篇一二二の一。一二三の一。

## 第二十一章

1 詩篇八五の五。

## 第二十二章

1 詩篇二五の七。

2 ヘブル書一〇の三五、三六。

3 詩篇六六の一。

4 コリント後書五の四。

5 詩篇五七の一。

## 第二十三章

1 ルカ傳二二の四〇。マタイ傳二四の四二。

2 コリント後書六の二。イザヤ書四九の八。ルカ傳六の一九。

3 詩篇一四四の四。

4 ルカ傳一六の九。

5 ペテロ前書二の二。

6 ヘブル書三一の一。

## 第二十四章

1 *Re-pice finem*(終りを慮れ)とは元來希臘人の諺なりしを羅典人の採用するに至りしなり。本書第四篇の二十七章註1参照。



- 2 コリント前書三の一三、一五。
- 3 これ中世紀の信仰なりき。ダンテ神曲地獄篇煉獄篇参照。
- 4 神曲煉獄篇第二十三曲参照。
- 5 詩篇一〇七の四二。
- 6 ルカ傳二二の二〇。
- 7 本書第一篇第一章参照。
- 8 ヨハネ第一書四の一七、一八。

## 第二十五章

- 1 ロマ章一二の二。
- 2 詩篇三七の三。
- 3 *Substrahere se violenter ad quod natura vitiose inclinatur.* アリストテレス「倫理學」二の九参照。
- 4 テサロニケ後書三の六。

## 第二篇

### 第一章

- 1 ルカ傳一七の二〇、二二。
- 2 ヨエル書二の一二。
- 3 ロマ書一四の一七。
- 4 詩篇四五の一三。
- 5 ヨハネ傳一四の二三。
- 6 同一二の三四。
- 7 詩篇三八の一五。
- 8 ヘブル書一三の一四。
- 9 ペテロ前書二の一。



01 聖ベルナルトの *Serm. ab Diu. viii. Est nimis sapo is cui quacque res sapiunt ut sunt.*  
 11 ロマ書八の二八。

## 第二章

1 ペテロ前書五の五。詩篇二五の九。

## 第六章

- 1 ヨハネ第一書三の二一。
- 2 イザヤ書四八の二二。同五七の二一。
- 3 ミカ書三の一。
- 4 詩篇一四六の四。
- 5 ロマ書五の三。ガラテヤ書六の一四。

- 6 サムエル前書一六の七。
- 7 コリント後書一〇の一八。

## 第七章

- 1 イザヤ書三六の六。マタイ傳一一の七。
- 2 イザヤ書四〇の六、七。ペテロ前書一の二四。
- 3 マタイ傳一〇の三九。

## 第八章

- 1 ヨハネ傳一一の二八。
- 2 マタイ傳一六の二六。
- 3 同一三の四四。



4 詩篇三四の八。同四六の一〇。

## 第九章

- 1 St. Laurentius. 西班牙のフェスカに生れ、羅馬の教會の執事たりしが、紀元二五八年の八月十日に、皇帝ヴレリアヌスの下に殉教せりと傳へらる。即ち法王シキストウス二世より委託されし教會の寶物を交附すべしと羅馬の知事が彼に命じたりし時に拒絶し、病者貧民を集めて、「見よ、こゝに基督の教會の寶あり」と云へり。知事怒りて彼を焙器の金網の上に乗せて焼殺す。「基督に對する彼の愛は焔によりて壓倒せられず、外に燃えし火も内に燃えし火に比しては弱かりき」と羅馬教會日讀祈禱書に録さる。ダンテ神曲天國篇第四曲八二行參照。
- 2 法王シキストウス二世。聖ラウレンティウスはその執事たりき。兩人共に殉教せり。傳へ云ふ、シキストウス迫害せられんとするや、ラウレンティウスの悲しむを見、豫言的に「わが子よ、悲しむこと勿れ、三日の後に汝はわれに従はん」と云へりと。
- 3 詩篇三〇の六一一。

- 4 ヨブ記七の一八。  
5 ヨハネ黙示録二の七。

## 第十章

- 1 ヨブ記五の七。  
2 マタイ傳二二の二一。  
3 ルカ傳一四の一〇。  
4 ヨハネ傳五の四四。  
5 Idipsam(英語の the Same)。こゝには大文字にて録さる。詩篇四の九(羅典譯)は In pace in Idipsam dormiam とあり。聖アウグステイヌスもアケムビスも Idipsam を神の稱號と解せり。  
6 ヨブ記一三の一五。



## 第十一章

- 1 マタイ傳二〇の二二。
- 2 ヨハネ傳一二の三六。同一六の一六。
- 3 箴言三一の二〇（羅典譯）。
- 4 ルカ傳一七の一〇。
- 5 詩篇二五の一六。

## 第十二章

- 1 マタイ傳一六の二四。ルカ傳九の二三。
- 2 マタイ傳二五の四一。
- 3 同二四の三〇。

- 4 ヨハネ傳一九の一七。
- 5 ロマ書六の八。
- 6 ルカ傳二四の二六。
- 7 コリント前書九の二七。
- 8 ロマ書八の一八。
- 9 コリント後書一二の二。
- 10 使徒行傳九の一六。
- 11 同一九の二三。



## 第三篇

## 基督の言

- 1 マタイ傳一一の二八。
- 2 ヨハネ傳六の五一。
- 3 マタイ傳二六の二六。コリント前書一一の二四。
- 4 ヨハネ傳六の五六。
- 5 同六の六三。

## 第一章

- 1 列王紀略上八の二七。

## 第二章

- 1 ルカ傳一の四三。
- 2 詩篇七八の二五。
- 3 ヨハネ傳六の三三、五一。
- 4 詩篇一四八の五。
- 2 ペテロ前書三の二〇。
- 3 創世記五の三二および同七の六を比較参照せよ。
- 4 出埃及記二五の一〇（七十人譯）。
- 5 サムエル後書六の一四。
- 6 アモス書六の五。

## 第三章



- 1 詩篇六八の一〇。
- 2 同八六の四。
- 3 ルカ傳一九の九。
- 4 マルコ傳一の三四。マタイ傳一五の三二。
- 5 創世記八の二一。
- 6 コリント後書五の六(羅典譯)。
- 7 詩篇一四七の五。

#### 第 四 章

- 1 詩篇二一の三。
- 2 同二〇六の四。
- 3 同五三の四(羅典譯)。

- 4 マタイ傳一一の二八。
- 5 創世記三の一九。

#### 第 五 章

- 1 詩篇七八の二五。
- 2 テモテ前書四の一六。

#### 第 七 章

- 1 エゼキエル書三三の一一。
- 2 同一八の二一。イザヤ書四三の二五。

#### 第 八 章



1 ルカ傳一四の三三。

第十章

1 ヨブ記一の六。

第十一章

1 ルカ傳七の二八。

2 ヘブル書一の六。

3 雅歌二の一六、一七。

4 コリント前書二三の一〇。

5 同二三の一二。

6 コリント後書三の一八。

7 ヨハネ傳一の一四。ヨハネ第一書一の一。ペテロ前書一の二五。

8 ヘブル書六の一二。テスト書二の一三。

9 コリント後書五の七。

10 詩篇一九の一〇五。

11 エゼキエル書四〇の三八、三九。

12 ヘブル書六の一九。九の三。

13 詩篇二二の五（羅典譯）。

14 利未記一九の二。二〇の二。

第十二章

1 マルコ傳一四の一、二、一五。ルカ傳二二の七、一二。

2 コリント後書五の七。



3 詩篇一〇二の七。

第十三章

1 雅歌八の一。

2 エゼキエル書三三の一。

3 ヨハネ傳一五の四。一七の二、二二—二三。

4 雅歌五の一〇。

5 イザヤ書四五の一五。

6 申命記六の七。

7 同四の八。

第十四章

1 詩篇三一の一九。

2 ルカ傳二四の三〇—三五。

第十五章

1 イザヤ書六〇の五。

2 詩篇一一八の二。

3 同二三の四。(羅典譯)。

4 同一二七の四。

第十六章

1 創世記四の一二、一四。

2 コリント前書六の一七。